

春はあけほのやうやうしろくなりゆく山きは

すこしあかりてむらさきたちたる雲のほそくたなひきたる夏はよる月
の比はさらなりやみも猶ほたるとひちかひたる

雨などのふるさへおかし秋は

夕暮夕日花やかにさして山きはいとちかくなりたるにからすのね

ところへ行とてみつよつふたつなとひゆくさへあはれなりまして

鴈などのつらねたるかいとちいさくみゆるいとおかし日いりはてゝ風
の音虫の音なと冬はつとめて雪のふり

たるはいふへきにもあらず霜などのいとしろく又さらてもいとさむき

に火なといそきをこしてすみもてわたるもいとつきつきしひるになりて
ぬるくゆるひもて行はすひつ火おけの火もしろきはい

かちになりぬるはわるし

比は正月三月四五月七八月九十一月十二月すへておりにつけつ

ゝひとゝせなからおかし

正月一日はまして空のけしきうらうらとめつらしくかすみこめたるに
世にある人

はずかたかたち心ことに

おかし七日雪まのわかなつみあをやかにれ

いはさしもさるこのめちかゝらぬ所にもてさはき

あを馬みんとてさと人は車きよけにしたてゝ

見にゆく中御門のとしきみ引いつるほとかしらともひとゝころ
にまるひあひてさしくしもおちよそいりなとわつらぶ

もおかし左衛門陣などに殿上人もあまたたちなとしてとねりの
むまともをとりておとろかしてわらふはつかに見いれたるはた

てしとみなとの見ゆるにとのもりつかさ女官などの行ちか

ひたるこそおかしけれいかはかりなる人ここのへを

ならすらんとおもひやらるゝに

うちにも

見るはいとせはきほとにてとをりかかほのきぬもあらはれしろきものゝゆ

きつかぬ所はまことにくろき庭に雪のむら

消たる心ちしいと見くるし馬のあかりさはきたるも

おそろしくおほゆれは引いられてえよくもみやらねす八日人人悦

してはしりさわく車のをともつねよりはことに聞えてお

かし十五日はもちかゆのせくまいりかゆの木ひきかくして家のこの

君たちわかき女房のうかゝふうたれしとよふゐしてつねにう

しろに心つかひしたるけしきもおかしきにいかにしてける

にかあらんうちあてたるはいみしうけうありとうちわらひ
たるもいとへはへしねたしとおもひた

るもことはりなりこそよりあたらしうかよふむこの君なとうち
へまいるほとを心もとなくところにつけてわれは

とおもひたる女房ののそきおくの方にたゝ

すまふ御前にゐたる人は心えてわらふをあなかまかま

とまねきかくれと君みしらすかほにておいらかにて居給へ

りこゝなるものとり侍らんなどいひよりはしり打てにくれ

はあるかきりわらふおとこ君もにくからすあいきやうつきてゑみ

たる事におとろかすかほすこしあかみてゐたるも

おかし又かたみにうちおとこなとをさへうつ

めるいかなる心にかあらんなきはらたちうちつる人をのろひまかまかし

くいふもおかし内わたりなとやんこ

となきもけふはみなみたれたるかしこまりなしちも

くのほとなと内わたりはいとおかし雪ふりこほりなとしたるに申文

もてありく四位五位わかやかに心ちよけなるはいとたの

もしけなりおいてかしらしるきなとか人にとかく案内いひ

女房のつほねによりてをのか身のかしこきよし心をや

りてとききかするをわかき人人は

まねをしてわらへとい

かてかはしらむよきにそうし給へなといひて

もえたるはよしえすなりぬるこそいとあはれな

れ

三月三日うらうらとのとかにてりたるもゝの花はいまさき

はしむる柳なといとおかしくこそさらなれそれも又まゆにこもりた

るこそおかしけれひろこりたるはにくし花もちりたる後はうたてそみゆ

るおもしろくさきたる梅をなくおりておほきな

る花かめにさしたるこそわざとまことの花かめふさなとしたるよりもおかし

けれ梅のなをしにいたしうちきしてまらうともあれ御せうとの

君たちにもあれそちかくゑて物なと打いひたるいとおかし

とりむしのひたいつきいとうつくしうてとひありくいとお

かし

まつりのころはいみしうおかしき

木々の木のはまたいとしけうはなうてわかやかにあをみたるに

霞もきりもへたてぬ空のけしきのなにとなくそゝるにお

かしきにすこしくもりたる夕つかたよるなとしのひたる郭公のとをう

空みゝかとおほゆるまでたととしきをきゝつけたらんなに心ちかは

せんまつりちかくなりてあをくちはふたあゐなどの

物とをもゝしまきつゝほそひつのふたにいれかみ

なとにけしきはかりつゝみて行ちかひもてありくこそ

おかしけれすそこむらこまき染なとつねよりも

おかしうみゆわらはへのかしらはかりをあらひつくる

ひてなりはみなほころひたえみたれかゝりたるかたいしく

つなとのをすけさせてさはきいつしかその

日にならなんといそきはしりありくもお

かしあやしくおとりてありくものともさうそ

きたてつれはいみしくちやうさといふ

法師などのやうにねりさまよふいかに心もとなからんほとにつけてお

ほやうは女あねなとのとも人してつくるひ

ありくもおかし

ことことなるもの法師の事はおとこ女の

ことはけすのことはにかならずもしあましたる

思はん子を法師になしたらむこそはいとこゝろくるしけれさるはいとたの

もしきわさをたゝきのはしなとのやうにおも

ひたらんいとをしさうしのものゝあしきをくひいぬ

るをもいふわかきは物もゆ

かしからむ

女なとのあり所をもなとかいみ

たるやうにさしのそかすもあらむそれをもやすからすいふ

ましてけんさなとのかたはいとくるしけなりみたくまの

かゝらぬ山なくありくほとにおそろしきめも見しるしありきこえてきぬれ

はこゝかしこによはれときめくにつけてやすけもなしいたくわつらぶ人にか

ゝりて物のけてうするもいとくるしければこうして打ねふれはねぶりな

とのみしてとかむるもいと所せくいかに

おもはんとこれはむかしの事也いま

やうはやすけなり

大進なりまさか家に宮のいてさせ給に東の門にはよつあしになして

それより御こしはいらせ給北のかとより女房の車ともちんやのぬねは

いりなむやとおもひてかしらつきわるき人もいたくもつくるはずよせてをる

へきものとおもひあなつりたるにひりやうけの車などは門ちぬさければ

えいらねはれいのゑんたうしきてをるゝにはいとにくゝはらたゝしけ

れといかゝはせん殿上人地下たちそひみるもねたし御前

にまいりてありつるやうけいすれはこゝにても人はみるましくやはなとか
はさしもうちとけつるとわらはせ給ふされとそれはみなめなれて侍れはよ
くしたてゝ侍らんしもそおとろく人も侍らんさてもかはかりなる家に車
いらぬ門やはあらん見えはわらはんなどいふほとにしもこれまいらせんと
て御すゝりなとさしいるいていとわろくこそおはしけれなとてかそのかと
せはくつくりてはずみ給ひけるそといへはわらひて家のほと身のほとに
あはせて侍なりといらふされと門のかきりをたかくつくりける人もきこゆる
はといへはあなおそろしとおとろきてそれはうごうか事にこそ侍なれふ
るきしんしなとに侍らすはうけ給はりしるへくも侍らさりけりたまたま此
道にまかりいりにければかうたにわきまへられ侍なといふいて御みちもか
しこからさんめりゑんたうしきたれとみなおちいりてさはきつるはといへは
雨のふり侍れはけにさも侍らんよし又おほせられかくへき事もそ侍
まかりたち侍りなんとていぬなにごとそなりまさかいみしうおちつるはとゝ
はせ給ふあらず車のいらさりつる事申侍と申ておりぬおなし
ほとつほねにすむわかき人人なとして万の事もしらすねふたければ
ねぬ東のたいのにしのひさしかけてある北のさうしにはかけ
かねもなかりけるをそれもたつねす家ぬしなればよく知てあけ
てけりあやしうかれはみたる物のこゑにてさぶらはんにはいかゝいかゝ
とあまたゝひいふこゑにおとろきて見れば木丁のうしろにたてたる火
の光はあらはなり障子を五寸はかりあけていふなりけりいみしうおかし
さらにかやうのすきすきしきわさゆめにせぬものゝ家にをはしましたり
とてむけに心にまかするなめりともふもいとおかし我方はらなる人
をおこしてかれ見給へかゝるみえぬものあめるをといへはかしらをもたけ
てみやりていみしうわらぶあれはたそけしうにといへはあらず家ぬしと
つほねあるしとさため申へき事の侍なりといへは門の事をこそ申つれ
さうしあけ給へとやはいふなをその事申侍らんそこにさ
ぶらはんいかにかにといへはいと見くるしき事ことさらにえおはせしと
てわらぶめれとわかき人人おはしけりとてひきたてゝいぬる後にわらぶ
事いみしあけぬとならはたゝまついりねかしせうそこをするによかな
りとはたれかはいはむとけにおかしきにつとめて御前にまいりてけいす
れはさる事も聞えさりつるを夜部の事にめてゝいりにたりけるなめり
あはれあれをはしたなくいひけんこそいとをしけれとわらはせ給ふひめ
宮の御かたのわらはへのさうそくせさすへきよしおほせらるゝにわら
はのあこめのうはをそひはなに色にかつかまつらすへきと申を又わらぶ
事はりなりまた姫宮の御前の物はれいのやうにてはにくけにさぶらは
んちうせいをしきちうせいたかつきにこそよくさぶらはめと申をさてこ

そはうはをそひきたるわらはへもまいりよらめといふをなをれいの人のつらにこれなわらひそいときすくなるものをいとをしけにと

せいせさせ給もおかしちうけんなるおり大進物きこえんと有と

人のつくるをきこしめして又なてうこといひてわらはれんとならむと仰らるゝいとおかし行てきけと仰らるれば態といてたれは一よの門の事を

中納言にかたり侍しかはいみしうかんし申されていかてさるへからんおりにたいめんして申うけ給はらんとなむ申されつるとて又ことも

なし一よの事やいはんと心ときめきしつれといましつかに御つほねにさぶらはんとていぬれはかへりまいりたるにさて何事そとの給はずれば申つる事をさなんとまねひけいして態せうそしよひいつへきことにそ

あらぬやをのつからしつかにつほねなどにあらむにもいへかしてわらへはをのか心ちにかしこしとおもふ人のほめたるをうれしとや思ふとてつけしらするならんとの給はする御けしきもいとおかし

うへにさぶらふ御ねこはかうぶり給て命婦のをとゝとていとおかしければかしたかせ給ふかはしにいて給ふをめのとのむまの命婦あなまさな

やいり給へとよぶにきかて日のさしあたりたるに打ねふりてゐたるをおとすとておきなまろいつら命婦おとゝくへといふにまことかとしてしれものはしりかゝりたれはをひえまとひてみすの内にいりぬあさかれゐのまに

うへはをはしますに御覽していみしうおとるかせ給ねこは御ふところにいれさせ給ひてをのこともめせは蔵人たゝたかまいりたるに此お

きなまろうちてうしていぬ島になかしたつかはせたゝいまと仰らるればあつまりてかりさはくむまの命婦をさいなみてめのとかへてんいとうしろめたしと仰らるればかしくまりて御前にもいてすいぬはかりいてゝたきく

ちなとしておひつかはしつあはれいみしくゆるきありきつるものを三月三日に頭弁柳のかつらをせさせもゝの花かさしにさゝせ梅こしにさゝせ

なとしてありかせ給しかゝるめみむとはおもひかけゝむやとあはれかるをものゝおりはかならずむかひさぶらぶにさうさうしくこそあれなといひて三四日になりぬひるつかたいぬのいみしくなく声のすれはなにそのいぬ

のかくひさしくなくにかあらむと聞によろつのいぬとも走さわきとぶらひに行みかはやうとなりものはしりきていぬを蔵人二人して

うち給ふしぬへしなりさせ給ひけるかかへりまいりたるとてうし給ふといふ心うの事やおきなまろなゝりたゝたかさねぶさなうつといへはせいしにるほとにからうしてなきやみぬしにければ門のほかに引す

てつといへはあはれかりなとする夕つ方いみしけにはれあさましけなるいぬのわひしけなるかわなゝきありけはあはれおきなまろかかゝるいぬやは此ころは見ゆるなといふにおきな丸とよへとみゝにも聞いれすそれ

そといひあらずといひくちくち申せは右近そみしりたるよへとてしもなる
をまつとみの事とてめせはまいりたりこれはおきな丸かとみせさせ給ににて
侍めれとこれはゆゝしけにこそ侍めれ又おきなまるとよへはよろこ

ひてまつてくるものをよへとよりてこそあらぬなめれそれは打ころしてす
て侍めとこそ申つれさるものとも二人してうたんにはいきなんやと申
せは心うからせ給くらうなりて物はせたれとくはねはあらぬものにい
ひなしてやみぬるつとめて御けつりくしにまいり御てうつまいりて御か
ゝみもたせて御覽すればさぶらふにいぬのはしらのもとにつゐたる

をあはれ昨日おきな丸をいみしう打しかなしにけんこそかなし

けれなにの身にかこの度はなりたらんいかにわひしき心ちしけんと打
いふほとに此ねたるいぬふるひわなゝきて涙をたゝおとしにおとす

いとあさましさはこれおきな丸にこそありけれ夜へはかくれしのひてあ
るなりけりとあはれにくゝておかしき事かきりなし御かゝみをもうちをき
てさはおきな丸といふにひれふしていみしくなく御前にもおち

わらはせ給ふ人人まいりあつまりて右近内侍めしてかくなと仰らるれ
はわらひのゝしるをうへにも聞召てわたらせおはしましてあさまし

ういぬなともかかふる心ある物なりけりとわらはせ給うへの女房たちなども聞
てまいりあつまりてよふにたゝいまそたちうこく猶かほなとはれ

ためりゆくてをせさせはやといへはこれをつゐてにいひあらはしつる
なとわらはせ給にたゝたか聞て大はん所の方よりまことにや侍らん

かれ見侍らんといひたれはあなゆゝしさるものなしといはすればさり

ともつゐに見つくるをり侍なんさのみもえかくさせ給はしといふ也さての
ちかしこまりかうしゆるされてもとのやうになりなき猶あはれかられてふる
ひなきいてたりしほとこそよにしらすおかしくあはれなりしか人人にも
いはれてなきなとす

正月一日三月三日はいとうららかなる五月五日くもりく

らしたる七月七日はくもりて七夕はれた

る空に月いとあかくほしの姿みえたる九月九日は

あかつきかたより雨すこしふりてきくの露もこちたうそほちおほひたる
わたなともてはやされたるつとめてはや

みにたれとくもりてやゝもすれはふりおちぬへくみえたるおかし

よろこひそうするこそおかしけれうしろをまかせてしやくとりて御前の方
にむかひてたてるをはいしふたうしさはくよ

いまたいりのひむかしを北の門とそいふならの木のはるかたかきかた
てるをつねに見ていくひろあらんなといふに権中将のもとよりうちきりて定

證僧都の枝あふきにせさせはやとの給しを山階寺の別当になり

てよろこひ申の日近衛つかさにてこの君のいて給へるにたかきけいしをさへ

はきたれはゆゝしくたかしいてぬるのちこそなとその枝あふきはもたせ

給はぬといへは物わすれせすとわらひ給ふ

山はおくら山みかさ山このくれ山わすれ山いりたち山かせ

山ひえの山かさとり山こそはいかならむ

とをかしけれいつはた山のち瀬山かさとり山

ひらの山床の山はわかかなもらすなと御門のよませ給ひけんいとお

かしいふせの山あさくら山よそにみるかおかしきいはた山おひれ

山もりんしの祭のつかひなとおもひ出らるへし

手向山みわの山いとおかし

音羽山まちかね山たまさか山みゝなし山末の松山

かつらき山みのゝお

山はゝそ山くらぬ山きひの中山あらし山さらしな山おは

すて山をしほ山あさまの山かたゝめ山かへる山いもせ山

みねはつるはの嶺あみたの峯いやたかの峯

はらはたかはらみかのはらあしたの原その原萩はらあはつの原なし

はらうなひこか原あへの原しのはら

いちはたつの市つはいちはやまとにあまたありなかに長谷

寺にまうつる人のかならずそこにとゝまりければ観音の御えんある

にや心ことなりおふの市しかまの市あすかの市

ふちはかしこふちいかなるその心をみえてさる名をつきけんとおか

しなிரいその淵たれにいかなる人のをしへならんあをいろの淵こそ

おかしけれ蔵人などの身にしつへくていなふちかくれの淵

のそきの淵たま淵

うみは水うみよさのうみかはくちの海伊勢の海

みさゝきはつくひすのみさゝきは原のみさゝきあめのみさゝき

わたりはしかすかのわたりみつはしのわたり

いゑは近衛御門二条一条よしそめ殿の宮せかゑ

みかゑすか原の院れせい院

とつ院小野宮紅梅あかたのぬととつ二条小六条

清涼殿のうしとらのすみの北のへたてなる御さうしにはあら海の

かたいきたるものとおそろしけなるてなかあしなかをそかゝれたる

うへの御つほねの戸をしあけたれはつねにめにみゆるをにくみなとしてわ

らぶほとにかうらんのもとにあをきかめの大なるすへて桜のいみ

しくおもしろきか五尺はかりなるをいとおほくさしたれはかうらんのもと

までこぼれさきたるにひるつかた大納言殿桜のなをしすこしなよら
かなるにこき紫のさしぬきしるき御そともうへにこき

あやのいとあさやかなるをいたしてまいり給へりうへのこなたにおはしま
せは戸口のまへなるほそきいたしきにみ給ひて物なとそうし給み
すの内には女房さくらのからきぬともくつるかにぬきたれつつ藤山ぶ
きなと色色にこのもしくてあまたこはしとみのみすよりをしいてたる
ほとひのおましのかたにおものまいるあしをとたかしけはひなとをし
とをしといふこゑきこゆうらうらとのとかなる日のけしきいとお
かしきにはての御はんもたるくら人まいりておもそのすれはなかとよ
りわたらせ給ふ御ともは大納言殿にまいらせ給ひてあり

つる花の本にかはりみ給へり宮の御前の御木丁をし
やりてなけしのもとにてさせ給へるなとたゝ何事ともなくよろつ
にめてたきをさふらふ人もおもふ事なきを心ちするに月日もかはりゆ
けともひさにふるみむろの山とみやたかくといふ事をゆるゝか
にうちよみいたしてみ給へるいとおかしとおほゆるけけにそちとせもあら
まほしけなる御ありさまなるやはいせんつかまつる人のおのこともな
とめすほともなくわたらせ給ぬ御すゝりのすみすれと仰せらるゝにめはそ

らにのみたゝおはしますをのみ見たてまつればほとつきめもはなちつへ
ししるきしきしをゝしたゝみてこれにたゝいまおほえん古こと
かけと仰らるゝにとにみ給へるにこれはいかにと申せはとくかきて
まいらせ給へおのこはことまずへきにも侍らすとてさしいれ給
へり御すゝりとりおろしてとくとくたゝおもひめくらさてなにはつもな
にもふとおほえんとせめさせ給になとさはおくせしにかすへて
おもてさへあかみてそおもひみたるゝや春の歌花の心なとさいふ
に上らう二三書てこれにと有に

年ふれはよはひは老ぬしかはあれと花をしみれば物おもひもなし
といふ事を君をしみれはと書なしたるを御らんしてたゝ此心
はえとも床しかりつるそと仰らるゝつめてに円融院の御時
御前にてさうしに歌ひとつかけと殿上人に仰せられけるをいみしう
かきにくゝすまひ申人人ありけるさらにてのよさあしさ歌

只今の関白殿道隆の三位中将と聞えける比
しほのみついつもの浦のいつもいつも君をはふかく思ふやはわれ
といふ歌をすゑをたのむやはわれと書給へりけるをなんいみしくめてさ
せ給けると仰らるゝもすゝろにあせあふる心ちそしけるわか

ゝらん人はさもえかくましき事のさまにやとそおほゆるれいのことよ
かく人人もあひなくみなつゝまれて書けかしなとしたるもあり
古今のさうしを御前にをかせ給ひて歌ともの本を仰られてこれか
すゑはいかにと仰らるゝにすへてよるひる心にかゝりておほざる
けによくおほえす申出られぬことはいかなる事ぞ宰相の君そ十は
かりそれもおほゆるかはまして五六三などはたおほえぬよしをそ
けいすへけれとさやはけにくゝ仰事をはへなくもてなすへきといひ
くちをしかるもおかししと申人なきをはやかて読つゝけ
させ給をさてこれはみなしりたる事ぞなとかくつたなくはあるそ
といひなけく中にも古今あまた書つしなとする人はみなおほえぬへき
事ぞかし村上の御時せんようてんの女御と聞えけるは小一条の左
大臣殿の御むすめにおはしましけれはたれかはしり聞えさらんまた
姫君におはしけるときちゝおとゝのをしへ聞えさせ給ひけるは
には御てをならひ給へつきにはきんの御ことをいかて人にひき
まさんと仰せさて古今廿巻をみなうかへさせ給はんを御かく
もんにはせさせ給へとなむ聞えさせ給ひけるときこしめしをかせ給ひて御
ものいみなりける日古今をかくしてわたらせ給
ひけれは女御あやしとおほしけるに御さうしを
ひろけさせ給ひてその年その月なにおりその人のよみたる歌はいかに
ととひ聞えさせ給にかうなりと心えさせ給もおかしきものゝ
ひかおほえもしわすれたるなどもあらはいみしかるへき事もわりなくお
ほしみたれぬへしそのかたおほめかしからぬ人二三人はかりめしいてゝこ
いししてかすをゝかせ給はんとしてひきこえさせ給ひけんほといかに
めてたくをかしかりけん御まへにさぶらひけん人さへこそうら山しけれせ
めて申させ給けれはさかしうやかてすゑまでなとはあらねとすへて露
たかふ事なかりけりあさましく猶すこしおほめかしくひか事見つけてを
やまんとねたきまでおほしめしける十巻にもなりぬさらにはふようなりけ
りとして御さうしにけさむして御とのこもりぬるもいとめてたしかし
いとひさしうありておきさせ給へるに猶この事さうなくてやま
んいとわるかるへしとして下十巻あすにもならはことをもそ見給ひあ
はするこよひさためむとて御とのあふらちかくまいりて夜ふくるま
てなんよませ給ひけるされとつゐにまけ聞えさせ給はすなりにけりうへわ
たらせ給ひてのちかゝる事なんと人人殿に申奉りけ
れはいみしうおほしきはきて御すきやうなとあまたせさせ給ひてそなたにむ
かひてなむ念しくらせ給ひけるもすきす敷あはれなる事也なと語
いてさせ給をうへ聞めしてめてさせ給いかてさおほくよませ給ひ

けんわれは三まき四巻たにもえよみはてしとおほせらるむかしは糸せ物
もすきをかしうこそありけれこの比かやうなる事やはきこゆ

るなと御前にさふらふ人々うへの女房のこなたゆるされたるなとまいり
てくちくちいひ出なとしたるほとまことにおもふ事なく

こそおほゆれ

おひさきなくまめやかにえせさいはひなと見てみたらむ人はいふせくあなつ
らはしくおもひやられてなをさりぬへからん人のむすめなどはさしましらは
せ世中の有様もみせならはさまほしう内侍なとにてもしはし

あらせはやとこそおほゆれ宮つかへする人はあはあはしなとわるき事
に思ひいひたるおとこそいとにくけれさる

事そかしよにかしこき御前をはしめ奉りかむたちめ殿

上人四位五位六位女房さらにもいはす見ぬ人はすくなくこそはあらめ女房
のすんさともその里よりくるものともをさめみかはやうたひしか

はらといふまでいつかはそれはちかくれたりしとのはらなとはいとさしも
あらずやあらんそれもあるかきりはさそあらんうへなといひてかし

つきすへたるに心にくからすおほえんことはりなれと内侍のすけ
なといひておりおり内へまいり祭のつかひなとにいてたるもおもたゝ

しからすやはあるさてこもりぬる人はたいとよしすりやうの五節
なといたすおりさりともいたうひなひみしらぬ事人にとひきゝ

なとせしかしと心にくき物なり

すさましき物ひるほゆるいぬ春のあしる三四月の紅梅のきぬ

ちこのなくなりたるうふや火おこさぬひおけち火る

牛しにたるうしかひはかせのうちつゝき女子うませたる

かたゝかへに行たるにあるしせぬ所ましてせちぶんはすさまし人

の国よりおこせたる文の物なき京のをもさこそおもふらめともされとそ
れは床しき事もかきあつめ世にある事も聞はよし人

のもとにわさときよけに書たてゝやりつる文の返事みんいまは

きぬらんかしとあやしくをそぎと待ほとにありつる文をむすひたるも

たて文もいときたなけにもちなしてふくためてうへに引

たりつるすみさへきえたるをおはせさりけりもしは物いみとてとり

いれすなといひてもてかへりたるいとわひしくすさまし又かならずくへき人
のもとに車をやりて待にいりくる音すれはさなゝりと人人

出てみるに車やとりさまにやりいれてなかゑほうとつちおるすをい

かなるそとゝへはけふはおはしまさすわたり給はずとて

うしのかきりひき出ていぬる又いゑゆすりてとりたるむこのこすなり

ぬるいとすさましさるへき人の宮つかへするかりやりていつしかとおもふ

もいとはいなしちこのめのとのたゝあからさまとていぬるをもと
むれはとかくあそはしなくさめてとくこといひやりたるにこよひはえまいる
ましとてかへしをこしたるすさまじうのみにもあらずにくさわりな
し女なとむかふるおとこましていかならんまつ人のある所に夜すこしふ
けてしのひやかに門をたゝけはむねすこしつふれて人いたし
とはするにあらぬよしなき物のなのりしてきたるもかへすかへすさま
しといふ中にもけんしやの物のけてうすとていみじうしたりかほ
にとこやすゝなともたせてせみこゑにしほりいたしよみいたれといさゝ
かさりけもなくこほうもつかねはあつまりてねんしいたるに男女
あやしとおもふに時のかはるまでよみこうしてさらにつかすたちねとてすゝ

とりかくしてあないとけんなしやとうちいひてひたいよりかみさまにかしら
さくりあけてあくひをおのれ打してよりふしぬる

ちもくにつかさえぬ人のいゑことしはかならずと聞

てはやうありし物ともほかほかにありつるかたみ中にすむ

物ともなとみなあつまりきて出入車のなかへもひまなく見えも

のまつてするともにも我我もとまいりつかふまつり物くひさけのみの

ゝしりあへるにはつるあかつきまで門たゝくをともせずあやしなとみゝ

たてゝきけとさきおふ声声してかんたちめなとみないて給ふ物

きくによひよりさむかりわなゝきおりつるけすおのこなといと物つけにあ

ゆみくるをゝるものともはとひたにもえとはすほかより来たる物などそ

殿はなにゝかならせ給へるなとふいらへにはなのせんしにこそは

とかならずいらふる誠にたのみける物はいみじうなけかしと

おもひたりつとめてになりてひまなくをりつる物もやうやうひとりふたり

つゝすへりつゝいてぬふるものゝさもえゆきはなるましきは来年

の国々を手をおりてかそへなとしてゆるきありくいみじう

いとをしうすさましけなりよろしくよみたりとおもふ歌を人のかりや

りたるに返せぬけさう文はいかゝせんそれたにおりをかしうなとあるにか

へしせぬは心おとりす又さはかしうときめかしき所にうちふるめきたる

人ののをのかつれつれといとまある儘にむかしおほえてことなる事

になき歌よみしておこせたるものゝありあふきみしくとおもひてこゝろ

ありとしりたる人にとらせたるにその日になりておもはずなるゑなとかきて

えたるうぶやしなひむまのはなむけなどのものゝつかひにろくなとらせぬ

はかなきくすたまうつちなともてありく物もかならずとらすへしお

もひかけぬ事にえたるをはいとけうありとおもひたるけふはかならず

さるへきつかひそと心ときめきてきたるにたゞなるは誠にすさまじむことりして四五年までうぶやのさはきせぬ所

おとなゝる子ともようせすはむまこともはいありきぬへき人のおやとちのひるねしたるおほ方わらはへなるほと心のちにもおやのひるねしたるはより所なくすさましくそありしねおきて

あむるゆははらたゞしくさへこそおほゆれしはすのつこもりのなかあめ百日はかりのしやうしのけたいとやいふへからん八月のしらかさねちあへすなりぬるめのと

たゆまるゝ物さうしの日のをこなひ日とをきいそ
き寺にひさしく籠たる

人にあなつらるゝ物家のきたおもて

あまりに心よきと人にしられたる人年おひたるおきな

又あはあはしき女つゐのくつれ

にくき物いそぐ事あるおりになかつ事するまら人あなつらはしきほ

どの人ならばのちになどいひてもおひやりつべけれどもさすがに心はづかしき人いとにくしすゞりにかみのいりてすられたる又すみの中に

石のこもりてきしきしときしみたるにはかにわづらふ人のあるに

げんざもとむるにれいある所にはあらでほかにあるたづねありくほどに待とをにひさしきをからうじて待つてよるこびながらかちせさするに此ころ物のけにこうじにけるにやゐひすなはちねぶり

こゑになりたるいとくしなでうことなき人のすゞるに象がちに物いたくいひたる火おけすびつなどに手のうら打かへしかへししはをしのべなどしてあふるものいつかはわかやかなる人などのさはしたりしおひはみうたであるものこそ火おけのはたにあしさへ打かけて物いふまゝにをしすりなどもすらめさやうのものは人のもとにきてゐんとする所あふきしてちりはらひはきすてゝゐもさだまらず

ひろめきてかりぎぬのまへした様にまくり入てもゐるかしかゝる事はいふなきゝはにやとおもへとすこしよろしき物の式部大夫

するかのせんしなどいひしかさせしなり又さけのみてあめきてくちをさくりひけあるはそれをなてゝさかつき人にとらするほとこのけしきいみしくにくしなやみくちわきさへひきたれ又のめなといふなるへし身ふるひをしわらはへのこほ

とのにまいりてなとうたふやうにするそれはしも誠によき人のさし給しより心つきなしとおもふなりものうらやみし身のうへなけき人のうへいひ露はかりの事もゆかしかりきかまほしかりていひしらぬをはえんしそしり又わづかに聞わたる事は我もとよりしりたる事のやうに

ことこと人に語しらへいふもいとにくしものきかんとおもふほとにな
くちこからすのあつまりてとひちかひなきたるしのひてくる人
見しりてほゆるいぬは打もころしつへしさるましうあなかちなる所にか
くしふせたる人のいひきしたる又みそかにしのひてくる所になかゑほし
さすかに人に見えしとまとひいつるほどに物につきさはりてそよると
いはせたるいみしうにくしいよすなとかけたるを打かつきてさらさらとな
らしたるもいとにくしもかうのすはましてこはきものうちをかるゝ
いとしるしそはをやをらひきあけて出入するはさらにならず又やり戸
などあらくあくるもいとにくしすこしもたくるやうにてあくる
はなりやはするあしうあくればさうしなともほめかしこほめくこそし
るけれぬふたしとおもひてふしたるにかのほそ声になのりて
かほのもとにとひありくは風さへさる身のほとにあるこそいとにくけれき
しめく車にのりてありくものみゝもきかぬにやあらんといとにくしわか
のりたるはその車のぬしさへにくし物語なとするにさし出
て我ひとりさいまぐるゝものさしいらへはすへてわらは
もおとなもいとにくしむかし物語なとするに我しりたりけるはふとお
ていひくたしなとするいとにくしねすみのはしりありくいとにくしあか
らさまにきたる子ともわらはへをらうたかりておかしき物ともなと
とらするにならひてつねにきてゐいりしやうちうしぬる
にくし家にても宮つかへ所にてもあはてありなんとおもふ人のきたる
にそらねをしたるに我もとにあるものとおこしよりきていきたなし
と思ひかほにひきゆるかしたるいとにくしいまゝいりのさしこえてものし
りかほにをしへやうなる事いひうしろみたるいとにくし我しる人にて
あるほとのはやう見し女のことほめいひ出しなとするも過てほ
とへにたれとなをにくしましてさしあたりたらんこそおもひやらる
れされとそれはさしもあらぬやうもありかしはなひて誦文する人お
ほ方の家の男しうならてはなたかくひたるものいとにくし
のみもいとにくしきぬの下におとりありきてもたくるやうにするも又いぬ
のもろ声になかなかと鳴あけたるまかましくにくし
にくき物めのとの男こそあれ
女子はされとちかくよらねはよしおの
子ゝはたゝ我物にりやうして立そひうしろみいさゝかもこの御
事にたかぶものをはつめさんし人にもおもひたらすあしけれ
とこれかとかをは心にまかせいふ人しなけれは所えいみしきおもゝち
してことおこなひなとするよ

文ことはなめき人こそいとゝにくけれ世をなのためにかきなかつたること

はのにくさこそさるましき人のもとにあまりかしこまりたるもけにわるき事
そされと我えたらんはことほり人のもとなるさへにくこそある大
方さしむかひてもなめきはとかくいふらんとかたはらいたしましてよき
人なとをさ申物はさ

るはおこにていとくし男しうなとわろくいふいとわろし我つかふ物
なとおはするの給ふなといひたるいとくしこもとに侍と

いふもしをあらせはやと聞事こそおほかれ

あい行なとことはなめきなといへはいは

る人もわらふかくおほゆれはにやあまりてうろろするなといはる

まてある人もわろきなるへし殿上人宰相なとをたなる名をいさ

かつましけならすいふはいとかたはなるをけによくさいはす女はうのつ

ほねなる人をさへあの御まへ君なといへはめつらかにうれしとおもひてほむ

る事そいみしき殿上人きんたちを御前よりほかにてはつかさをのみいふ

又御前にて物をいふとも聞しめさむにはなとてかは丸

かなといはんさいはさらんにくしかくいはむにはなとてわるかる

へき事かは

ことなる事なき男のひきいれ声してえむたちたるすみつかぬすり

女房のもの床しうするたなるたにいとしもおもはしからぬ人にくけ事
したる

ひとり車にのりてもの見る男いかなる物にかあらんやん事なからすとわか
き男ともの物床しうおもひたるなと引のせてもみよかしすきかけにた一人
かよひて心ひとつにまはりいたらむよ

あかつきにかへる人のよへをきしあぶきふところかみもとむとてくらけれ
はさくりあてんあてんとたきもわたしあやしあやしなと打いひもとめ出で
そよそよとふところにさしいれて扇ひきひろけてふたふたと打つかひ

てまかり申したるにくしとはよのつねいとあひきやうなしおなし事夜ふかく
いつる人のゑほつしのをつよくゆひたるさしもゆひかためすともありぬ

へしやをらさなからさし入たりとも人のとかむへき事かはい

みしうしとけなうかたくなしくなをしかりきぬなとゆかみたりともたれかは
みしりてわらひそしりもせんとする人はなをあかつきのありさまこそおかし
くもあるへけれわりなくしふしふにおきかたけなるをしめてそのかしあけ
すきぬあな見くるしなといはれて打なけくけしきもけにあかす物つきに

しもあらんかしておほゆさしぬきなともぬなからきもあへすまつさしよりて
夜一よいひつる事ののこりを女のみにいひぬれなにわさすとな

けれとおひなとをはいふやうなりかしかうしおしあけつまとある

所はやかてもるともにゐて行てひるのほとのおほつかなからん事なとも

いひ出にすへりいてなんはみをくられて名残もおかしかりぬへし名残
もおもひ出所ありいときはやかにおきてひろめきたちてさしぬきのこしつ
よくひきゆひなをしうへのきぬかりきぬも袖かいまくりよろつさ
しいれおひつよくゆふにくし

こゝろときめきする物すゝめの子ちこあそはする所のまへ渡りた
るからかゝみのすこしくらき見たるよき男

の車とゝめて物のあないせさせたるよきたき物たきてひとりふし
たるかしらあらひけさうしてかうにしみたるきぬきたることにみる
人なき所にても心のうちはなをおかしまつ人なとある夜雨のあし風
のふきゆるかすもふとそおとるかるゝ

過にし方恋しき物ひいなあそひのてうとをりかうしふ

たあぬのえひ染などのさいてのをしへされてさうしの中にありけるを
見付たるあはれなりし人の文雨などのふりてつれつれなり

日さかしいてたるかれたるあぶひこそのかはほり月のあかきよ

こゝろ行ものようかきたる女衆のことはおかしうつゝけておほかる物見
のかへさにのりこほれてをのこともおほくうしよくやる物の車
はしらせたるしろくきよけなるみちのくにかみにいとほそくかゝへ
てはあらぬふてして文かきたるてうはみにてうおほくうちたる河
舟のくたりさまはくるめのよくつきたるうるはしきいとのおはせ
くりしたる物よくいふをんや

うして河原に出てすそのはらへしたる夜ねおきてのむ水つれつれ
なるおりにいとあまりむつましくはあらすつとくあらぬまら人のきて世

の中の物語この比ある事のおかしきもにくきもあやしきもこれにか

ゝりかれにかゝりおほやけわたくしおほつかながらすきゝよくこほりかに
かたるいと心行心ちす神寺などにまうてゝ物申さするに寺には

法師神はね宜なとやうのものゝおもふほとよりもすきてと

ゝこほりなく聞よく申たる

ひらうつけはのとやかにやりたるはしらせたるはかるかるしくみゆ

あしろははしらせたる人の門よりわたるをふとみるほとも

なくすきてともの人ばかりはしるをたねならんとおもふこそおかしけれゆる
ゆると行はいとわろし

牛はひたいいとちいさくしろみたるかはらの下しろきあしのしもをの
すそしろき

馬はむらさきのまたらつきたるあしけいみしく黒きかあしかたのわたり
なとにしるき所つす紅梅のけに

てかみをなとはいとしろきけにいふかみといひつへし

のいとすくなくみえたる

うしかひはおほきにてかみあかしらかにてかほあかみてかとかとしけなる
雑色隨身はやせてほそやかなるよき男も猶わかきほと

はさるかたなるそよきいたくこえたるはねふたからん人とおほゆ
小舎人はちいさくてかみうるはしきかすそさわらかにすこし

色なるかこゑおかしうてかしこまりて物なといひたるそりやうやうしき
ねこはうへのかきりくろくてことはみなしろく

説経師はかほよきほとつとまもらへたるこそとく

ことのたうとさもおほゆれほかめしつれはわするゝににくけなるはつみ
やうらんとおほゆ此ことはとゝむへし少年などのよろしきほとこ

そかやうのつみえかたの事もかきけめいまはいとおそろし
又たうとき事道心おほかりとて説経すといふ所にさいそに

いにある人こそ猶このつみの心ちにはさしもあらてみゆれ
くら人おりた

る人昔はこせんなといふ事もせずその年はかりうちわたりにはま
してかけもみせさりけるいま

はさしもあらさめる蔵人五位とてそれをしもそいそかしく
もてつかへんと猶名残つれつねにて

心ひとつはいとまある心ちすへかめれはさやうの所
にいそき行を一度二度聞そめつねはつねにまうてまほしく

なりて夏などのいとあつきにもかたひらいとあさやかにうす
ふたあゐあをにふのさしぬきなとふみちらしてゐためりゑ

ほうしに物いみつけたるはけふさるへき日なれとくと
くのかたにはさはらす見えんとにやいそききてその事するひしりとも

の語して車たつる
をさへそみいれことにつきたるけしきなりひさし

くあはさりける人などのまうてあひたるめつらしかりてちかくぬ
より物語しうなつきをかしき事なとかたり出てあぶきひろうひろ

けてくちにあてゝわらひさうすくしたるすゝかひまさ
くりて手まさくりにうちしすかりをものいふひやうしにこなたに打

やりなとして車のよしあしほめそりしなにかしてその人
のせし経供養八かう

といひくらへぬたるほどに此説経の事も聞いれすなにかはつねに
聞事なればみゝなれてめつらしうおほえぬにこそはあらめさ

はあらて講師めてしはしあるほどにさきこしをはする車

とゝめておるゝ人せみのはよりもかる

けなるなをしさしぬきすゝしのひとへなときたるもかりきぬすかたにては
わかくほそやかなる三四人はかりさふら

ひのものとさはかりしていれはもとゐたりつる人も少
うちみしろきくつるきてかうさのもとちかきはしら

のもとなどにすへたれはさすかにすゝ

をしもみきうにふしをかみてきゝゐたるをかうしもはえはえしくおもふ
なるへしいかてかたりつたふはかりとときいてたり

ちやうもんするとたちさわきぬかつくほとにもなく

よきほとにてたちいつとて車とものかた見おこせて我とち打いふ

も何事ならむとおほゆみしりたる人をおかしくおもひみしらぬはたれ
ならんそれにやかれにやなとめをつけておもひやらるゝこそをか

しけれ説経し八講しけりなと人のいひつたふるにその人

はありつやいかゝはなとさたまりていはれたるあまりなり

なとかはむけにさしのそかてはあ

らんあやしき女いみしくきくめる物をはさ

れとこのさうしなといてきはしめつ方はかちありきする人はなかりきたま
さかにはつほさうそくなとはかりしてなまめきけさうしてこそありしか

それも物まうてをせし説経なとはことにおほくもきかさりきこの比

そのかきいてたる人のいのちなかくて見ましかはいかはかりそしり誹謗
せまし

菩提といふ寺にけちゑん講するかきゝにまうてたるに人のもと

よりとくかへり給へいとさうさうしといひたれははすの花ひらに

もとめてもかゝるはちすの露をゝきてうき世に又はかへる物かは

と書てやりつ誠にいとたうとくあはれなれはやかてとまりぬへくそお

ほゆるつねたうか家の人のもとかしさもわすれへし

こしら川といふ所はこ一条の大将殿の御家それにてかんだち

めけちゑんの八講し給ふにいみしくめてたき事にて世中の人のあつ

まり行てきくをそからん車はよるへきや

うもなしといへは露とゝもにいそきをきてけにそひまなかりけるなかえの

うへに又さしかさねて三はかりまては少ものもこえぬへし六月十

よ日にてあつき事よにしらぬほとなり池のはちすをみやるのみそ少

すゝしき心ちする左右のおとゝたちをゝきたてまつりてはおはせぬかんだ

ちめなしふたあぬのなをしさしぬきあさきのかたひらをそすか

し給へる少おとなひ給へるはあをにひのさしぬきしるきかたひらも

すゝしけなりやすちかの宰相なともわかやきたちてすへて

たうとき事のかきりにもあらずおかしき物見なりひさしのみすたかくま
きあけてなけしうへにかんたちめおくにむかひてなかなかとみ給り
そのしもには殿上人わかききんたちかりさうそくなをしなともいとおかしく
てゐもさたまらずこゝかしこにたちさまよひあそひたるもいとおかしさ
たかたの兵衛佐なかあきらの侍従なと家の子にていま少出入
たりまたわらはなる君達なといとおかしうておはずこし曰たけたるほ
とに三位中将とは関白殿をそきこえしかうのうす物のふたあゐのなをし
おなしさしぬきこきすわつの御はかまにはえたるしるき

ひとへのいとあさやかなるをき給ひてあゆみいり給へるさはかりか
るひすすしけなる中にあつかはしけなるへけれといみしうめてたしと
そ見え給ふほそぬりほねなとほねはかはれとたゝあかきかみをおなしなみ
に打つかひもち給へるにはなてしこのいみしうさきたるにそいとよ用に
たるまた講師ものほらぬほとにかけはんともしてなにゝかあらんものま
いるへしよしちかの中納言の御ありさまのつねよりもまさりてきよけに
おはするさまそかきりなきかんたちめの御名などはかくへきにもあらぬ

をたれなりけん少ほとふれはなるによりなんいゝあひはな
はなといみしくにほひあさやかなるにいつれともなきなかのかたひらをこれ
は誠にすへてたゝなをしひとつをきたるにてつねに車のかたを
見をこせつゝ物なといひをこせ給おかしと見ぬ人はなかりけんをの
ちにきたる車のひまもなかりければ池にひきよせてたてたるを見給て
実方の名に人のせうそこひゝしくいひつへからん物ひとりとめ
せはいかなる人にかあらんえりてゐておはしたるにいかゝいひやるへきとち
かくゐ給るはかりいひあはせてやり給はん事はきこえすいみしくよ
ういして車のもとにあゆみよるをかつはわらひ給しりのかたにより
ていふめりひさしくたてれば歌なとよむにやあらん兵衛佐返しおもひまうけ
よなとわらひていつしか返事きかんとおとなかんたちめまてみ
なそなたさまに見やり給へりけにけんそこの人は見るもおかしう
ありしを返事きゝたるにやすこしあゆみくるほどにあふきをさし出てよひ
かへせは歌なとのもしをいひあやまちてはかりこそよひかへさめひさ
しかりつるほどにあるへきことかはなをすへきにもあらし物を
とそおほえたるちかくまいりつくも心もとなくいかにいかにとたれもと
ひ給へとふともいはす権中納言見給へはそこによりてけしきはめ
申三位中将とくいへあまりあり心すきてしそこなふとの給にこれ
もたゝおなし事になん侍といふはきこゆ藤大納言は人よりもけにさし
のそきていかゝいひつるとの給めれば三位中将いとなをき木をなん

をしおりためるときこえ給に打わらひ給へはみななにとなくさと打わらふ声聞えやすらん中納言さてよひかへされつるさきにはいかゝいひつるこれやなをしたる事ととひ給へは久しくたちて侍りつれともかくも侍らざりつればさはまいりなむとてかへり侍るをよひてなとぞ申たれか車ならむ見しりたりや

などの給ふほとに講師のほりぬればみなぬしつまりそなたをのみゝるほとにこの車はかひけつやうにうせぬしたすたれなとたゝけふはしめたりとみえてこきひとへかさねにふたあゐの織物すわうのうす物のうはきなとにてしりにすりたるもやかてひろけなからうちかけなとしたるはけにと聞えて中中

いとよしとそおほゆるあさゝのかうしせいはんかうさのうへもひかりみちたる心ちしていみしくそあるやあつさのわひしさにしさすましきことのけふすくすましきをうちのきてたゝすこしきゝてかへりなんとしつるをしきなみにつとゐたる車のおくになりたれはいつへきかたもなしあしたのかうはてなはいかていてなむとてまへなる車ともにせうそこす

れはちかくたゝんかうれしさにやはやとひきいてあけていたすを見給ひていとかしかましきまでひとこといひにおいかんたちめさへわらひにくむきゝもいれていらへもせてせはかりいつれは権中納言やゝまか

りぬるもよしとてうちわらひ給へるそめてたきそれもみゝにもとまらずあつきにまとひ出て人してこせんの中にはいらせ給はぬやうもあらしと聞えかけてかへり出にきそのはしめよりやかてはつる日までたてる車のありけるか人よりくともみえずすへてたゝあさましうゑなどのやうにてすこしければありかたくめてたく心にくゝいかなる人ならむいかてしらんととひたつねけるを聞給ひて藤大納言なにかめてたからむいとにくしゆゝしき物にこそあなれとの給ひけるこそおかしけれさてその廿日あまり中納言のほうしになり給ひにしこそあはれな

りしか桜などのちりぬるもなをよのつねなりやおいを待まのとたにいふへくもあらぬ御ありさまにぞ

七月はかりいみしくあつけねはよろつの所あ

けなから夜もあかすに月の比はねをきて見いたす

もいとおかしやみも又おかしあり明はたいふにもあまりたりいとつやゝかなるいたのはしちかくあさやかなるたゝみ一ひらかりそめにうちしきて三尺の木丁おくのかたにをし

やりたるそあちきなきとにこそたつへけれおくのうしろめたからんよ人はいてにけるなるへしうす色のうらいとこくてうへは所所すこし
帰りたるならすはこきあやのいとつやゝかなるいたくはな

えぬをかしらこめてひきゝてそねためる

かうそめのひとへくれなぬのこまやかなるすゝ

しのはかまのこしいとなくきぬのしたよりひかれたるもまたとけ
なからなめりそはのかたにかみの打たゝなはりてゆるゝかなる

ほとなかさをしはかられたるに又いつこより

にかあらむあさほらけのいみしう霧たちたるにふたあぬのさしぬきある
かなきかのかうそめのかりきぬしるきすゝしくれなぬのとほそに

こそあらめつやゝかなるかきりにいたくしめりた

るをぬきたれてひんのすこしふくたみたれはゑほ

うしのをしいれられたるけしきもしとけなく見ゆあさかほの露おちぬ

さきに文かかむとて道のほともなくおふ下草なとくちすさみ

て我方へ行にかうしのあかりたれは

すのそはをいさゝかあけて見るにおきていぬらん人もおかし

露をあはれとおもふにやしはしみたれは枕かみの方にほをる

むらさきのかみはりたる扇

ひろけなからありみちのくにかみのたゝうかみのほそやか

なるかはなくれなぬに少にほひうつりたるも木丁のもとにちりほひ

たり人のけはひのあれはきぬの中より見るに打ゑみ

てなけしにをしかゝりてぬぬれははちなとする

人にはあらぬとうちとくへき心はへにもあらぬにねた

ふも見えぬるかなとおもふこよなき名残の御あさひかな

とてすの内になからはかりいりたれは露よりさきなる

人のもとかしさといらふおかしき事とりたてゝ

かくへきにあらねとかくいひかはすけしきともにくからず

枕かみなる扇を我もちたる

してをよひてかきよするかあまりちかくよりくるにやと心

ときめきせられてひきそくたらるゝとりて見なとしてうとく

おほしたる事なとうちかすめうらみなとするに

あかうなりて人の声し日もさし出

ぬへし露のたえ間みえぬほとにといそきつる文もたゆみぬる

とこそうしるめたけれいてぬる人もいつのほとにか

と見えて萩の露なからあるにつけてあれと

えさし出す香のいみしうしめたるにほひいとおかしあま

りはしたなきほとになれはたち出て

我きつる所もかくやとおもひやらるゝもおかし

かりぬへし

木の花は梅のこくもうすくも紅梅桜

の花ひらおほきにいろよきか枝はほそうかれはれにさきたる藤
の花しななく色よくさきたるいとめてたし卯花はしなをとりに
何となけれと咲比のおかしう郭公のかけにかくるらんおもふにいと
おかしまつりのかへさに紫のゝわたりちかきあやしの家ともおとろ
なる垣ねなどにいとしろうさきたるこそおかしけれあを色のうへにしろ
きひとへかさねかつきたるあをくちはなとにかよひて猶いとおかし四月
のつこもり五月ついたちなとのころおひ橘のこくあをきに

花のいとしろくさきたるに雨のふりたるつとめてなとはよになく心ある
さまにおかし花の中よりこかねの玉かと見えていみしくきはやかにみ
えたるなどはあさ露にぬれたる桜におとらす郭公のよる

とさへおもへはにや猶さらにいふへきにもあらずなしの花よにすさま
しくあやしきものにしてめにちかくはかなきふみつけなとたにせ

すあい行をくれたる人のかほなとをみてはたとひにいふもけにその色よりし
てあいなく見ゆるをもちしにはかきりなき物にてふみにもつく

るなるをさりともあるやうあらんとてせめてみれば花ひらのはしにおかしき
にほひこそこゝろもとなくつきためれやうきひ御門の御使にあいて

なきけるかほにゝせて梨花一枝春の雨にほひたりなといひたるはお
ほろけならしとおもふに猶いみしうめてたき事はたくひあらしとおほえ

たり桐の花紫に咲たるは猶おかしきを葉のひろこり

さまうたてあれとも又こと木ともとひとしいふへきに

あらずもろこしにはこととしき名つきたる鳥のえりてこれにしもある

らんいみしう心ことなりましてことにつくりてさまさまになるねのいてくる

なとおかしなとよのつねにいふへくやはあるいみしうこそはめてたけれ木

のさまそにくけれとあふちの花いとおかしかれわれにさまこ

とに咲てかならず五月五日にあふもおかし

いけはかつまたいはれの池にえのゝ池初瀬にまいりしに水鳥

のひまなくたちさはきしかいとおかしくみえし也水なしの池

あやしうなとてつけるならむととひしかは五月なとすへて雨いたく

ふらんとするとしはこの池に水といふ物なくなんある又日のいみしく

てるとしは春の始に水なんおほく出るといひしなりむけになへて

河にてあらはこそさもつけめいつる折もあるなるを一すちにつけゝ

るかなといらへまほしかりしる沢の池うねめのなけゝるを

聞召て行幸なとありけんこそいみしうめてたけれねくたれかみをと人

丸かよみけんほといふもをろかなりたまへの池またなにの心に

付けるならむとおかしかゝみの池さやまの池みくりといふ歌のおか

しくおほゆるにやあらんこひぬまの池はらの池たまもはなかりそと
いひけむもおかし

ますたの池

節は五月にしくはなしさうぶよもきなどのかほりあひたるもいみ
しうおかしこのえの内を始めていひしらぬたみしかはらのす

みかまていかて我もとにしけくふかんとふき渡したるなをいとめつらし
くいつかことをりはさはしたりし空のけしきのくもり渡たるに

きさいの宮などにはぬい殿より御くすたまとて色色のいとをくみさけて
まいらせたれはみちうやうたてたるもやのはしらに左右に付たり九月九

日のきくをあやとすしのきぬにつみて参せたるおなしはしらに
ゆひつけて月ころあるくす玉とりかへてすつめるまたくす玉はきく

のおりまてあるへきにやあらんされとそれはみないとをひきとりて物ゆひ
などしてしはしもなし御せくまいりわかき人人はさぶふのさしくし

さし物いみつけなとしてさまさまからきぬかさみなかきねおか
しきをり枝ともむらこのくみしてむすひつけなとしたるめつ

らしういふへき事ならねといとおかして春ことにさくとして桜をよ
ろしうおもふ人やはあるつちありくわらはへなどのほとほとにつけてはいみ

しきわさしたりとつねにたもとまもり人に見くらへえもいは
すけつありとおもひたるをそはへたるこてのりわらはなとにひきたられ

てなくもおかし紫のかみにあぶちの花あをかみにさうふのかみほ
そうまきてひきゆひまたしろきかみをねにしてゆひたるもおかしいとな

かきねなどをふみの中に入たる人ともなともいとえ
んなり返事かゝむといひあはせかたらふとちはみせあはせなとする

おかし人のむすめやんことなき所に御文きこえ給ふ人もけふは心
ことにそなまめかしうおかしきたくれのほととぎすの名のりし

たるもすへておかしういみし
木はかつらこえふ柳橘そはの木はしたなき

心ちすれとも花の木とものちりはてゝをしなへたるみとりになりたる
中に時もわかすこきもみちのつやめきておもひかけぬ青はのなかより

さし出たるめつらしまゆみさらにもいはすその物ともなけれとやと
りきといふ名いとあはれなり榊りんしの祭御神楽のおりなと

いとおかしよに木ともこそあれ神の御前のものといひはしめけんもとりわ
きおかしくすの木はこたちおほかる所にもことにましらすたてらすおとろ

おとろしき思ひやりうとましきをちえにわかれて恋する人のためしに
いはれたるそたれかはかすをしりていひはしめけんとおもふにおかし

ひの木人ちかゝらぬ物なれとみつはよつはの殿づくりもおかし五月

に雨のこゑまねふらむもいとおかしかえての木さゝやかなる

にももえ出たる木すゑのあかみておなしかたにさしひろこりたる葉のさま
花もいと物はかなけにてむしなどの枯たるやうにておかし

此世ちかくもみえきこえずみたけにまうてゝ婦人なとしかも

てありくめるえたさしなどのいとてふれにくけにあらあらしけれとなにの
心ありてあすはひの木とつけゝんあちきなきかねことなりやたれにたの
めたるにかあらんとおもふにしらまほしうおかしねすもちの木人のなみなみ
なるへきさまにもあらねと葉のいみしうこまかにちぬさきかおかしきなり

あふちの木山橋山なしの木しゐの木はときはにいつれもあるを

それしも葉かへせぬためしにいはれたるもおかししらかしなといふ物ま

してみ山木の中にもいとけなくて三位二位のうへのきぬそむるおりは

かりそ葉をたに人のみるめれめてたき事おかしき

ことにますへくもあらねといつとなく雪のふりたるにみまか

へられてすさのをのみことの出雲国におはしける御ともにて人丸

よみたる歌なとをみるにいみしうあはれなりいひ事にてもおりに付て

も一ふしあはれともおかしともきゝをきつる物は草も木も鳥虫

もをろかにこそおほえぬゆつるはいみしうふさやかにつやめきたるはいと

あをふきよけなるにおもひかけするへくもあらぬくきのあかうきらきら

しうみえたるこそいやしけれともおかしけれなへての月ころは露もみ

えぬものゝしはすのつこもりにしも時めきてなき人の物にも

しくにやとあはれなるに又よはひのふるはかためのくにもしてつかひ

ためるはいかなるにかもみちせんよやといひたるもたのもしかし栢木

ぬとおかし葉もりの神のますらんもいとおかし兵衛督すけそう

なとをいふらんもおかしすかたなけれとするの木からめきてわろいゑのも

とゝは見えす

鳥はこと所の物なれとあうむはいとあはれなり

郭公くぬなしきみことりひはひたき都鳥川ちとりはともま

とはすらんこそ鷹の声は

とをくきこえたりあはれなりかもははねの霜うちはら

ふらんとおもふにおかしうくひすはよになくさまかたち声もおかしき物

の夏秋のすゑまでおひこゑに鳴たるとたいりのうちにすまぬそいとわ

ろき又夜なかぬそいきたなきとおほゆる十年はかりうちにさふらひて聞

しかとさらに音もせさりきさるは竹もいとちかくかよひぬへき枝の

たよりもありかしまかてゝきけはあやしの家の梅のなかなどにはは

なやかにそなき出たるや郭公はあさましくまたれてよりうちまち出られ

たる心はへこそいみしうめてたけれ六月などには誠にをともせぬか

すゝめならはうくひすもさしもおほえさらまし春の鳥

とたちかへるよりまたるゝ物なれはなをおもはすなるはくちおし人けなき

人をはしる人やはある鳥の中にからすとひなとの声をは見きゝ

いるゝ人やはある鶯は文などにつくりたれと心ゆかぬ心ちする

には鳥のひなゝき水鳥

ひたき山鳥は友をこひてなくにかゝ

みをみせたれはなくさむらんいとわかうあはれなりたにへたてたるほ

となといと心くるしつるはこちさまなれともなく声の雲ゐまでき

こゆらんいとめてたしかしあかきすゝめいかるかのおとりたくみとり

さきはいとみめもわるしまなこゐなともよろつにうた

てなつかしからねとゆるきの森に独はねしとあらそふらんこそおかし

けれをしいとあはれなりかたみにいかはかりつゝはねのうへの霜を

はらふらんなどいとおかしかりのこゑはるかなるいとあはれなりち

かきそわるきちとりいとおかしはこ鳥

あてなる物うす色にしらかさねのかさみけつりひのあま

つらにいりてあたらしきかなまりに入たる

梅の花に雪のふりたるいみし

ううつくしきちこのいちこくいたるかりのこわりたるもすいしやうのす

ゝ

むしはすゝむし松虫はたおりききりす蝶

我からひをむしほたるみの虫いとあはれなりおにのうみければ親

に似てこれもおそろしき心ちそあらんとておやのあしきゝぬを引きせ

ていま秋風ふかんおりにそこんするまでよといひてにけていにけ

るもしらす風の音聞しりて八月はかりになれはちゝよちゝよとはかな

けになくいみしくあはれなりひくらしぬかつき虫又あはれなりさる心

に道心おこしてつきありくらむ又おもひかけすくらき所などにほと

めきたるきゝつけたることおかしければへこそにくきものゝうちに入

つへけれあい行なくにくき物は人人しくかきいつ

へき物のさまにはあらねとよるつの物にゐかほなどに

ぬれたるあししてゐたるなとよ人のなにつきたるはかならすかたし夏

虫いとおかしくらうたけなり火ちかくとりよせて物語など見るにさ

うしのうへに飛ありくいとおかしありはにくけれとかろひいみし

うて水のうへなとをたゝあゆみぬありくこそおかしけれ

七月はかりに風のいたうぶき雨などの

さはかしき日おほかたいとすゝしければ扇も打

わすれたるにあせのかすこしかゝへたるきぬのうすきを

ひきかつきてひるねしたる

こそおかしけれ

にけなき物かみあしき人のしるきあやのきぬきたるしらかみたるかみにあふ
ひつけたるあしきてをあかきかみにかきたるけすの家に雪のふりたる五
月のさし入たるもいとくちおし

月のいとあかきにやかたなき

車にあめうしかけたるおいたる物

のはらたかくてあえきありく又わかき男もちたるいとみくるしきにごと
人のもとに行とてねたみたる

老たる男のねこよひたる又さやうにひけかちなる男のしゐつみた

るはもなき女のむめくいてすかりたるけすのくれなるのはかまきたるこの比
はそれのみこそあめれゆけいのすけのやかうかりきぬすかた

もいとやしけなり又人におちらるゝうへのきぬはたおとろおとろしくた

ちさまよふも人見つけはあなつらはしけんきのもやあるとたはふれにも

とかむ六位蔵人うへのはうくわんとうちいひてよになくきらきらしき

物におほえさと人けすなとはこの世の人とたにおもひたらすめをたにみあは
せておちわなゝく人のうちわたりのほそ殿などにしのひていりふしたるこそ
いとつきなけれ空たき物したる木張にうちかけたるはかま

のおもたけにいやしうきらきらしからんもおしはからるゝなとよさかしら
にうへのきぬわきあけねすみのをのやうにて我てかけたらんほとそにけ

なきやかうの人人也このつかさの程はねんしてとゝめてよりし五位

の蔵人も

ほそ殿に人とあまたあてありく物ともみやすからすよひよせて物など

いふにきよけなるおのこゝとねりわらはなとのよきつゝみふくろにきぬ

ともつゝみてさしぬぎのこしなとうちみえたるふくろにいれたる弓や

たてほそたちなともてありくをたかそとふにつめてなにかし殿のと

いひて行はいとよしけしきはみやさしかりてしらすともいひきゝもい
れていぬるものはいみしうそにくきかし

月夜にむな車のありきたるきよけな

る男のにくけなるめちたるひけくろにくけなる人の年おひたるか

物かたりする人のちこもてあそひたる

とのもりつかさこそなをおかしきものはあれしも女のきはゝさはかりうらや
ましきものはなしよぎ人にせさせほしきわさなりわかくてかたちよく
なりなとつねによくてあらんはましてよからんかし年老て物

のれいなとしりておもなきさましたるもいとつきつきしうめやすし

殿もりつかさのかほあいきやうつきたらんをもたりてさうそく時に

したかひてからきぬなといまめかしうてありかせは

やとこそおほゆれ

男は又すいしんこそあめれいみしく久しくおかしき君たちもすいしんもなきいとさうさし弁など

おかしよきつかさとおもひたれとも下さかねのしりみしかくてすいしんなきそいとわるきや

四季の御さうしのたてしとみのもとにて頭弁の人と物をいと久

いひたち給へればさひ出てそれはたれそといへは弁侍なりとの

給なにかはさもかたらひ給ふ大弁みえはうちすて奉りていなんものをといへはいみしくわらひてたれかかゝる事をさへいひきかせけんそれさなせそかたらふなりとの給ふいみしくみえておかしきすちなとたてたる事はな

くてたゝありなりやうなるをみな人はさのみしりたるに猶おくふかき御心さまを見しりたれはをしなへたらすなと御前にもけいし又さしろしめしたるをつねに女はをのれをよるこふものゝために

しゝぬといひたるもいひあはせつゝ申給とを

たあふみのはま柳なといひかはしてあるにわかき人人はたゝいひにくみみくるしき事になんつくろはすいふこの君こそうたて見えにくけれ

こと人のやうにと経し歌うたひなともせず世間すさましくなにし

にさらにこれかれに物いひなともせず女はめはたてさまにつきまゆはひたいにおひかゝりはなはよこさまにありともたゝくちつきあひきやうつきをとかひのしたくひなとおかしけにてこゑにくけならさらん人なむおもはしかるへきとはいひなから猶かほのいとくけなるは心うしとのみの給へはまいてをとかひほそくあいきやうをくれたらん人はあいなうかたきにして御前にさへあしうけいする物なとけいせせんとてもそ

のはしめいひそめし人をたつねしもなるをもよひのほせつほねなにもきていひさとなるには文かきてもみつからもおはしてをそくまいらはさん申たると申にまいらせよなどの給その人のさふらふなといひゆつれとさしもうけひかすなとおはするあるにしたかひさためすなにももてなしたるをこそよきにはすれとうしろみきこゆれと我もとの心のほんしやうとのみの給ひつゝあらたまらざる物は心なりとの給へはさてはゝかりなしとはいかなる事をいふにかとあやしかれはわらひつゝ中よしなと人ひとにもいはるゝかうかたらふとならなにかははつる見えなともせよかしとの給をいみしくにくければさあらん人はえおもはしとの給ひしによりて

にくゝもそなるさらはなみえそとをのつからみつゝ

きおりもかほをふたきなとして誠に見給はぬもま心に空事した

まはさりけりと思ふに三月つこもり比は冬のなをしのにくきにやあらん

うへのきぬかちにて殿上人とのぬすかたもあるつとめて曰さしいつるまでしきふのおもとゝひさしにねたるにおくのやり戸をあけさせ給ひてうへの御まへ宮の御前出させ給へればおきもあへすまとふをいみしくわらはせ給からきぬをかみのうへにうちきてとのみ物もなにもうつもれなからあるうへにおはしまして陣より出つる物なと御らんす殿上人の露しらてよりきて物いふなともあるをけしきなみせそとわらはせ給ふさてたゝせ給ふにふたりなからいさと仰らるれはいまかほなとつくるひてこそとてまいらすいらせ給ひてなをめてたき事ともいひあはせてゐたるに

みなみのやりとのそはに木丁の手のさし出たるにさはりてすたれのすこしあきたるよりくるみたるものゝみゆれはのりたかゝいたるなめりとおもひて見もいれて猶ことゝもをいふにいとよくゑみたるかほのさしいてたるをのりたかなめりそはとて見やりたればあらぬかほなりあさましとわらひさわきて木丁ひきなをしかくるれと頭弁にこそおはしけれ見え奉らしとつる物をといとくちおしもるともにゐたる人はこなたにむきてゐたればかほもみえず立出ていみしく名残なくもみつるかなとの給へはのりたかとおもひ侍れはあなつりてそかしなとかは見しとの給ひしにさへくさへくといといふ女はねをきたるかほなんいとよきとなんいへはある人のつほねに行てかいまみして又もしみえやするとてきたりつるなりまたうへのおはしつるなからあるをえしらすりけるよとてそれよりのちはちすつほねのすたれ打かつきなとし給ふめりき

殿上のなたいめんこそなをおかしけれ御前に人さぶらぶおりはやかてとふもおかしあしをとゝもしてくつれ出るをうへの御つねにひんかしおもてにみゝをとなへてきくにしる人のなのりにはふとむねつふるらんかし又ありともきかぬ人をもこのおりに聞つけたらんはいかゝおほゆらんなのりよしあしきゝくゝさたむるもおかしはてぬなりと聞ほとに灌くちのゆみならしくつのをととそゝめき出るに蔵人のいとたかくふみこほめかしてうしとらのすみのかうらにたかひきつきとかやいふぬすまひに御前の方にむかひてうしるさまにたれたれか侍ととふほとこそおかしけれほそうたかふなのり又人人さぶらはねはにやなたいめんつかまつらぬよしそうするをいかにととへはさはる事とも申にさきゝてかへるをまさひろはきかすと君たちのをしへければいみしうはらたちしかりてかんかへてたきくちにさへわらはるみつしところのおもたなどいふ物にくつをきてはらへのゝしるをいとをしかりてたかくつにかあらんえしらすと殿もりつかさ人人のいひけるをやゝまさひろかきたなきものそやとりにきてもいとさはかし

わかくてよろしき男のけす女の名いひなれてよひたるこそいとにくけれ

しりなからもなにとかやかたもしはおほえて

いふはおかし宮つかへ所のつほねなどによりて夜なとそさおほめ
かんはあしかりぬへけれと殿守つかささらぬた

ゝ所にてはさふらひ蔵人所にある物をいてゆきてよ

はせよかしてつからはこゑもしるきにはした物わらはへなとはされ
てよし

わかき人ちことはこえたるよしすこうなとおとなたちたる人はふ

ときよしあまりやせからめきたるは心いられたらんとおしはからる
よろつよりはうしかひわらはへのなりあしくてもたるこそあ

れことともはされとしりにたちてこそいけさきにつとまもられいくも
のきたなけるは心うし車のしりにことなる事なきをのことものつ

れたちたるいと見くるしほそらかなるおのこすいしんなど見えぬへきか
くるきはかまのすそなるかりきぬはなにも打なれはみたるはしる車

のかたなとにのとやかにてうちそひたるこそわるものとはみえ

ね猶大かたなりあしくて人つかふはわるかりきやれなとうきうきうちし

たれとなれはみてつみなきはさるかたなりやつかひ人などこそはありてわら
はへのきたなけるはあるましくみゆれ家にぬたる人もそこにぬたる人として

つかひにてもまら人などのいきたるにもおかしきわらはのあまた見ゆるはい
とおかし

人の家の門の前をわたるにさふらひめきたる物なとしてひめきたるおの

こつちにをる物なとしておのこゝの十はかりなるかかみおかしけなるかひ
きはへてもこはきてたるも又いつゝむつはかりなるかかみはくひのもと

にかひくゝみてつらいとあかうぶくらかなるあやしきゆみしも

とたちたる物なとさゝけたるいとつつくし車とゝめてい

たきいれまほしくこそあれ又さていくにたき物の香のいみしくか

ゝへたるいとおかし

よき家の中門あけてひらうけの車のしろうきよけなるはしすわうの
したすたれのにほひいとときよけにてしちにたてたるこそめてたけれ

五位六位などの下かさねのしりはさみてさくいとしろきかたに

うちをきなとしてとかくいきちかふに又さうそくしつほやなくひをいた

るすいしんのいていりたるいとつきつきしくりや女のいときよけなるかさ

し出てなにかし殿の人やさふらふといひたるおかし

灌はをとなしの灌ふるのたきは法王御覽しにおはしましけんこ

そめてたけれなちのたきは熊野にあるかあはれなる也とゝろき

灌

はしはあさむつの橋なからの橋あまひこの橋はまなの橋ひとつ

橋さのゝ船橋うた

しめの橋とゝろきの橋を川の橋かけはしせたの橋き

そちの橋堀江の橋かさゝきの橋ゆきあひの橋

おののうき橋やますけの

橋名をきゝたるおかしうたゝの橋

里はあさかの里なかめの里人妻のさといさめのさと

たのめの里あさふのさと夕日の里とをちの里ふし見の里

長ゐの里とりのさと人にとられたるにやあらむ我とりたるにやあらん

いつれもおなし

草はさうぶこもあふひいとおかし祭のおり神代よりとしてさるかさし

となりけんいみしくめてたし物のさまもいとおかしをもたかも名のおかし

きなり心あかりしけんとおもふに見くりひろむしるこけこたに雪間

のあを草かたにかたはみあやのもんにてあるもこと物よりはおかしあやふ

草はきしのひたゐに生らんもけにたのもしけなくあはれなりいつまで草

はおふる所いとはかなくあはれなり岸のひたゐよりもこれはくつれやす

け也まことのいしはいなとにはえおいすやあらんと思ふそわるき事

なし草はおもふ事なすにやあらんと思ふもおかし又あしきことをう

しなふにやといつれもおかししのふ草いとあはれなり屋のつまさし出た

る物のつまなとにあなかちにおひ出たるさまいとおかし

よもきいとお

かしたつはないとおかしはまちの葉はましておかしまるこすけうき草こまあら

れさゝたかせあさちあをつゝらとくさといふ物は風にぶか

れたらんをとこそいかならんとおもひやられておかしけれ

なつなならしはいとおかしはすのうき葉のいとらうたけにてのとかに

すめる池のおもてにおほきなるとちいさきとひろこりたゝよひてありくい

とおかしとりあけて物をしつけなとしてみるもよもにいみしうおかし

八重むくら

山すけやまゐひかけはまゆふあしくすの風

に吹かへされてうらのいとしろくみゆるもおかし

集は万葉集古今集後撰集

歌の題は都くすみくりこまあられさゝつほすみれひかけこも

たかせをしあさちしあをつゝらなしなつめあさかほ

草の花はなてしこからのさはらなりやまともめてたしをみなへしきゝ

やう菊の所所うつろひたるかるかや

りうたん枝さしなとむつかしけなれとこと花はみな霜かれ

たれといと花やかなる色あひにてさし出たるいとおかしわざととりた

てゝ人めかすへきにもあらぬさまなれとかまつかの花らうたけなり
名そつたてけなる鷹のくる花ともしにはかきたるかるひ

の花色はこからねと藤の花にいとよくにて春と秋とさくおかしきなりつほ
すみれおなしやうの物そかしおいていけはをしなとうししもつけの花
夕かほは

あさかほにゝていひつつけたるおかしかりぬへき花の

姿にてにくゝ身のありさまこそいとくちおしけれなとてさはたおひ出
けんぬかつきなといふ物のやうにたにあれかしされとなを夕かほといふ
はかりはおかしあしの花さらに見所なけれとみてくらな

といはれたる心はへあらんとおもふにたゝならずもしもすゝきにはをとらね
と水のつらにておかしうこそあらめとおほゆこれにすゝきをいれぬいと
あやしと人のいふめり秋の野をしなへたるおかしさはすゝきにこそあれ
ほさきのすわうにいとこきかあさ露にぬれて打なひきたるは

さはかりの物やはある秋のはてそいと見所なき色色にみたれ咲

たりし花のかたもなくちりたるのち冬のすゑまでかしらいとしく

おほきなをもしらて昔おもひ出かほになひきてこひろきたて

るは人にこそいみしうにためれよそふる事ありてそれこそあはれとも
思ふへけれ萩はいと色ふかく枝たをやかにさきたるか朝露にぬれてなよなよ
とひろこりふしたるさをしかのわきてたちならすらんも心ことなりからあふ
ひはとり分てみえぬと日の影にしたかひてかたぶく

らんそなへての草木の心ともおほえておかしき花

の色はこからねとさく山吹にいわつゝしもことなる事なけれと折もてそ見る
とよまれたるさすかにおかしさうひはちかくて枝のさまなとはむつかしけれ
とをかしなとはれゆきたる水のつらくる木のはしなとのつらにみたれさきた
る夕はへ

おほつかなき物十二年の山こもりの女おやしらぬ所にやみなるに

ゆきあひたるにあらはにもそあるとて火もともさてさすかになみぬたるいま
出きたる物の心しらぬにやんことなき物もたせて人のかりやりたるに
をそく来る物いはぬいはぬちこのそりくつかへりて人にもいたかれ
すなきたるくらきにいちこくいたる人のかほしらぬ物見

たとしへなき物夏と冬と夜と昼と雨降と日照とわかきと老た

ると人のわらふとはらたつと黒と白と思ふと

にくむとあぬときわたと雨ときりとおなし人なからも心さしう

せぬるは誠にあらぬ人とそおほゆるかし

ときはきおほかる所からすのねて夜中はかりにいねさはかしく

落まるひ木つたひてねおひれたるかたこゑになきたるこそひるのみめには

たかひておかしけれ

しのひたる所にては夏こそおかしけれいみしうみしかき夜の

いとはかなくあけぬるに露ねすなりぬやかて万みなあけな

からなれはすゝしうみわたされたりいますこしいふへきことのあれ

はかたみにいらへとも

するほとにたゝいたる前よりからすのたかくなきて行こそいとけせ

うなる心ちしておかしけれ

又冬のいみしくさむきに思ふ人とうつもれふして聞にか

ねのをとのたゝ物のそこなるやうにきこゆるもおかし鳥のこ

ゑもはしめははねのうちにくちをこめなからなけはいみしう物

ふかく遠きかつつきになるまゝに庭ちか

くきこゆるもおかし

けさうぶみにてきたるは

いふへきにもあらずたゝ打かたらひ又さしもあらねとをのつ

からきなとする人のすの内にてあまた人人ゐてもものなといふ

にいりてとみにかへりけもなきをともなるおのこわらはなと

をのゝえもくたしつへきなめりとむつかしけ

れはななかやかに打なかめてみそかにとおもひていふらめともあなわひ

しほんなうくなうかないまは夜中には越ぬらんといひたる

いみしう心つきなくかのいふ物はとかくもおほえす

此ゐたる人こそおかしう見聞つる事もうするやうにおほゆ

れ

又色に出てはえいはすあるとたかやかに打

いひつめきたるも下行水のほといとおかしたてしとみすいかい

のもとにて雨ふりぬへしなと

聞えたるもいとにくしう

き人の君たちなとのともなるこそさや

うにはあらねとたゝ人なとはさそあるあまたあらん中

にも心はへ見てそゐてありくへき

ありかたき物しうとのほめらるゝむこ又しうとめにおもはるゝよめの君

物よくぬくるしろかねのけぬきしうそしらぬ人のすさ

露のくせかたはなくてかたち心ありさまもすくれて世にあるほ

といさゝかのきすなき人おなし所にすむ人のかたみにはちかはし

たるとおもふかつみに見えぬこそかたけれ物語集な

と書つつす本につけぬ事よきさうしなとはいみしく心してかけと

もかならずこそきたなけになるめれ男も女も法師も

ちぎりふかくてかたらふ人の末までなりよき事つかひよきすんさか
いねりうたせたるにあなめてたと見えておこせたる

うちつほねはほそ殿いみしうおかしかみのこしとみあけた

れは風いみしう吹いれて夏もいと涼し冬は雪あらねなどの風に

たくひて吹いりたるもいとおかしせはくてわらはへなどのほりゐた

るもあしければひやうふのうしろなとかくしすへたれはこと所のつ

ほねのやうにこゑたかくえわらひなともせていとよしひるなとも

たゆまず心

つかひせらるよるはたましていさゝかうちとくへくもなき

かおかしき也くつの音の夜一よき

こゆるかとまりてたゝをよひ一つしてたゝくかその人なゝりと

ふとしらるゝこそおかしけれいとひさしくたゝくに音せねはねい

りにけるとや思ふらんねたく少みしろくをときぬのけはひもさ

なゝりと思ふらんかし扇なとつかふもしるし冬は火おけにやをらたつる火は

しのをともしのひたれときこゆるをいとゝたゝきまさりこゑにて

もいふにかけなからすへりよりてきくおりもあり又あまた

のこゑこゑして歌なとうたふにたゝかねとまつあけ

たれはこゝへとしもおもはぬ人もたちとまりぬ入へきやうもなくて

たちあかすも猶おかしみすのいとあをくおかしけ

なるに木丁のかたひらいとあさやかなるすそつま少

みえたるになをしのうしろにほころひすきたる君たち六位の

蔵人あをいるなにてうけはりてやり戸のもとにはそはませてえた

てらすへいの前なとにうしろをして袖うちあはせかちなるこそおかしけ

れ又さしぬきをしのいとこそあさやかにて色色のきぬともこほ

し出たる人のすをおし入てなからいりたるやうなるもとより見るはい

とおかしからんをいとよきよけなるすゝり引よせて文かきもしはかゝみ

こひてひんなどかきなをしたるもすへておかし

三尺

の木丁をたてたるにもかかうのしもはたゝ少そある戸にたてる人

うちにあたる人とものかほのもとにいとよくあたりたるこそ

おかしけれたけいとたかくみしかからん人なとやいかゝあらん猶世のつね

のはさのみそある

まして臨時のまつりのてうかくなとはいみしうおかしとの

もりの官人などのなか松をたかくともしてくるは引入てさき

はさしつけてはかりなるにおかしうあそひ笛ふき出て心

ことにおもひたる君たちの日のさうそくしてたちとまり物いひなとす

るに殿上人のすいしんとものさきしのひやかにみしかくをのか君とものれ
うにをひたるをあそひにましりてつねにすおかしうきこゆ猶

あけてかへるをまつに君たちのこゑにてあらたにおふるとみ草の花
うたひたるこの度はいまま少おかしきにいかなるまめ人にか

あらむすすくとさしあゆみて出ぬるもあれはわらふをしはしな
とさよをすてはいそき行とあめるなといへと心ちなとや

あしからんたうれぬはかりもし人やをひてとらふるとみゆるまで
まとひ出るもあめり

しきの御さうしにおはします比こたちなとはるかに物ぶり屋のさまもた
かうけつとけれとすゝるにおかしうおほゆもやおにありとてみなへた
て出して南のひさしにみ木丁たてゝまたひさしに女房はさふらぶこの

ゑの御門より左衛門の陣に入給ふかんたちめのさきとも殿上人のは
みしかければおほさきこさきとつけて聞なれてあまた度になれはそのこゑ

ともゝみな聞しられてそれかれそともいふに又あらずなといふも
おかし有明のいみし

うきりたる庭などにおりてありくをきこしめして御前にもおきさ
せ給へりうへなる人はみなおりなとしてあそふにやうやう

明もて行左衛門陣まかりて見んとて行は我も我もおひつきて行
に殿上人あまたしてなにかしひとこゑあにとすんしているをとすれば

にけ入て物なといふ声月見給ひけるなとめて給ふもあり夜もひ
るも殿上人のたゆる夜なしかんたちめまかてまいり給ふにおほるけにいそ

く事なきはかならずまいり給ふ

あちきなき物態おもひたちて宮つかへに出たる人の物うかりて
うるさけにおもひたる人にもいはれむつかしき事もあれはいかてかまかて

なんといふことくさをして出ておやをうらめしければ又まいりなんとい
ふよとりこのかほにくさけなるしふしふにおもひたる人を忍ひてむこにとり
ておもふさまならずとなけく人

いとおしけなき事人によみてとらせたる歌のほめらるゝされとそれはよし遠
きありきする人のつきつきえんたつねて文えんといはすれはしりたる人
のかりなをさりに書てやりたるになまいたはりなりとはらたちて返事もと
らせてむとくにいひなしたる

心ちよけなるものうつゑのほうし神楽の人ちやう池のはちすのむら雨
にあひたる御りやゑの馬おさ又御りやうゑ

のふりはた

とりもたる物くゝつのことゝり除目に第一の国えたる人

御仏名朝地こくゑの御屏風とり渡して宮御覽せさせ

給いみしうゆゝしきことかきりなしこれみよかしと仰せら
るれとさらに見侍らしとてゆゝしさにうつふしぬ雨いたくふ
りてつれつれなりとて殿上人うへの御つほねにめして御あそひあり道方
少納言ひわいとめてたしなりまさの君さうの琴ゆきより笛つねま
さの中将笛なといとおもしろしひとあそひあそひては琵琶を引
みたれあそふほとに大納言殿の琵琶の声やめて物語する事お
そしといふ事をすんし給ひしにかくれふしたりしもおき出て
つみはおそろしけれとなを物のめてたさはえやむましとてわらわる御こゑ
などのすくれたるにはあらねとおりの事さらにつくり出たるやうなりし
なり

頭中将のそゝるなる空事にていみしういひおとしなにしに人とおも
ひけんなど殿上人にてもいみしくなむの給と時にはつかしけれと誠
ならぬこそあらめをのつからきゝなをし給ひてんなとわらひて有にくる
とのまへ渡るにもこゑなとするおりは袖をふたきて露見おこせずい
みしうにくみ給ふをとかくもいはす見もいれてすすに二月つこもりかた
の比雨いみしうふりてつれつれなるに御物いみにこもりてさすかにさうさ
しくこそあれ物やいひにやらましとなんの給ふと人人まで語れと世にあ
らしなといらへてあるに一日しもにくらしてまいりたれば夜のおと
ゝにいらせ給ひにけりなけししにも火ちかくとりよせてさしつとひてへん
をそつくあなうれしとおほせなと見つけていへとすさまじき心ちしてな
にしにのほりつらんとおほえてすひつのもとにあたれば又そこにあつまり
ぬて物なといふになにかしさぶらふといと花やかにあやしきいつのま
になに事のあるそとはすれば殿守司なりたゝこゝもとに入つ
てならて申へき事なんといへはさし出たとふにこれ頭中将殿の奉
らせ給ふ御かへりとくといふにいみしくにくみ給をいかなる御文なら
むとおもへとたゝいま急き見るへきにあらねはいま聞えんとてふ
ところに入てふといりぬ猶人のものいひなとするきくに則
立歸りてさらはそのありつる文を給てことなむ仰られつる
とくとくとはいふにそあやしきをの物語なりやとてみればあをきうす
やうにまなにいときよけに書給へるを心ときめきしつるさまにもあらざり
けりらんせいの花の時の錦の帳のもとゝ書てすゑはいかにいかにとあるをい
かゝはすへからん御所のおはしまさは御覽せさすへきをこれか末し
りかほにたとたときまんなにかきたらむも見るしなとおもひまはす
ほともなくせめまとはせたゝそのおくにすひつのきえたるすみのあるして
草のいほり誰かたつねんとかき付てとらせつれと返事もいはずみな
ねてつとめていとゝくつほねにおりたれば源中将の声して草のいほり

やあるあるとおとろおとろしうとへはなとてかさ人けなき物はあらん
玉のうてなもとめ給はましかはいらへ聞えてましといふあなつれししにも
ありけるようへまでたつねんとしける物をとて夜へありしやう頭中将のとの
ゐ所にてすこし人人しきかきり六位まであつまりて万の人のうへむか
しいまとかたりいひしつゐてに猶この物むけにたえはてゝこそ
あらねもしいひつる事もやとまでといさゝなにともおもひたらすつ
れなきかいとねたきをこよひよしともあしともさため切てやみなんむつか
しとてみないひあはせたりし事をたゝいまはみるましとて入給ひぬとて
殿守司来しを又おひ返してたゝ袖をとらへてとうさいをせさせ
すこひとりもてこすは文を返しとれといましめてさはかりふる雨のさか
りにやりたるにいとゝく帰きたりこれとてさし出たるかありつる文なれば
返してけるかと打みるにをめけはあやしかななる事そとて
みなよりて見るにいみしきぬす人かな猶えこそすつましけれと見さわ
きてこれかもとつけてやらん源中将つけよなといふ夜ぶくるまでつけわつら
ひてなんやみにしこの事はからなす語つたふへき事也とな
むさためしといみしくかたはらいたきまでいひきかせて御名は
いまは草のいほりとなむ付たるとていそきたち給ひぬれはいとわろき名の
未まであらんこそくちをしかるへけれといふ程に修理亮のり光
いみしきよろこひ申にうへにやとてまいりたりつるといへはなそつ
かさめしありともきこえぬになにゝなり給へるそといへはいて誠に
うれしき事よへ侍しを心もとなくおもひ明してなむかはかりめん
ほくある事なかりきとてはしめありける事とも中将のかたりつるおなし事
ともをいひて此返事にしたかひてさる物あ
りとたにおもはしと頭中将の給ひしに
たゝにきたりしは中中かりきもてきたりしたひはいかならんとむねつ
ふれて誠にわるからんはせうとのためもわるかるへしとおもひしにな
のめにたにあらすそこの人の人のほめかんしてせうとこそきけとの給ひ
しかは下心にはいとうれしけれとさやうのかたにはさらにえくふんすまし
き身になん侍と申しかはことくはへきゝしれとにあらすたゝ人にかたれ
とてきかするそとの給しなん少くちおしきせうとのおほえに侍りしか
とこれかもとつけ心みるにいふへきやうなしこと又これか返しをやすへ
きなといひあはせあわろき事いひては中中ねたかるへしとて夜なかまでな
むおはせしこれ身のためにも人の御ためにもさていみしきよろこひに侍ら
すやつかさめしにせうせうの司えて侍らんはなにと思ふましくなん
といへはけにあまたしてさる事あらんともしらてねたくも有けるか
なこれになんむねつふれておほゆる此いもつとせうとゝいふ事はつへま

てみなしろしめし殿上にもつかさ名をはいはてせうとそつけたる物
語などしてゐたるほとにまつとめしたれはまいりたるに此事仰られ

んとてなりけりうへのわたらせ給てかたり聞えさせ給ひておのこともみなあ
ふきにかきてもたると仰らるゝにこそあさましうなにのいはせた
る事にかとおほえしかさて後に袖木丁なとりのけておもひなを
り給ふめりし

かへるとしの二月廿五日に宮しきの御さうしにいてさせ給ひし御ともにま
いらて梅つほにのこりゐたりし又の日頭中将の御せうそこと昨日の夜く
らまへまうてたりしにこよひかたのふたかれはたかへになむゆくま
た明さらむにかへりぬへしかならずいふへき事ありいたくたゝかせてまて
との給へりしかとつほねに人人はあるそこゝにねよとてみくしけ殿
めしたれは参ぬひさしくねおきておりたれは夜部いみしう人のたゝかせ給
ひしからうしてうらてかねをきて侍しかはうへにかさらはかくなむと
の給ひしかともよもきかせ給はしとてふし侍にきと語る心もとなの事
やとてきくほとに殿守司きて頭の殿のきこえさせ給なりたゝいま

まかりいつるをきこゆへき事なんあるといへはみるへき事ありてうへゝなん
のほり侍そこにてといひてつほねはひきもやあけ給はんと心ときめき
してわつらはしければ梅つほの東おもてのはしとみあけてこゝにと
いへはめてたくそあゆみいて給へる桜のなをしいみしくは

なはなとうらの色つやなとえもいはすけふらなるにえひ染のいとこきさし
ぬきに藤のおり枝ことごとしくおりみたりて紅の色うちめなとかゝやく
はかりそみゆる下にしろきうす色なとあまたかさなりたりせはきまゝ

にかたつかたにはしもなからすこしすのもとちかくよりぬ給へるそ誠にゑ
にかき物語のめてたき事にいひたるこれこそはと見えたる御前の梅

は西はしろく東は紅梅にて少おちかたになりたれと猶おかしき

にうらうらと日のけしきのとかにて人に見せまほすの内にましてわか
やかなる女房なとのかみうるはしくなくこほれかゝりなとそひゝた
めるいま少見所あり

おかしかりぬへきにいとさたすきふるふるしき人のかみなとも我にはあら
ねはにや所所わなゝきちりほひて大方色ことなる事なれはあるかなき
かなるうすにひとあはひも見えぬきぬともなとあれ

は露のはへも見えぬにおはしまさねはもゝきすうちきすかたにてゐたるこそ
物そこなひにくちおしけれしきくなんまいる事つけやあるいつかまいる
などの給ふさてもよへあかしははてゝさりともかねてさいひてしかはまつ
らんとて月のいみしうあかきに西の京よりくるまゝにつほねをたゝ
きしほとからうしてねおひれおきいてたりしけしきいらへのはしたなざなと

語てわらひ給ふむけにこそおもひつむしにしかなとさる物をはおきたる
なとけにさそありけんといとおかしくもありしはしあり

て出給ふぬとよりみむ人はおかしう内にいかなる人のあらんとおもひぬ
へしおくのかたよりみ出されたらんうしろこそとにさる人やともえおもふ
ましけれ暮ぬれはまいりぬ御まへに人人おほくつとひ給

て物かたりのよきあしきにくき所なとをそさためいひしろ少なかつ
ゝか事なと御前にもおとりまさりたる事仰られけるまつ

これいかにとはれなかつゝかわらはをいのあやしさをせちに仰ら
るゝそなといへはなにかはきんなども天人おるはかりひきていとわるき

人なり御門の御むすめやはへたるといへはなかつゝかかた人と心をえてさ
れはよなといふにこの事もとよりはひるたゝのふかまいりたりつるを見まし
かはいかにめてまとはましとこそおほゆれと仰らるゝに人人さて誠

につねよりもあらまほしうこそなといふまつその事こそけいせんと思
ひてまいり侍りつるに物かたりのことにまきれてとてありつる事をかたり聞
えさすればたれもたれもみつれといとかくぬいたる糸針めまでやとは
ほしつるとてわらぶにしの京といふ所のあれたりつる事見る人

あらましかはなんおほえつるかきなともみなやふれてこけおいてな
と語つれば宰相の君のかはらの松にありつやといらへたりつるをいみ
しうめてゝにしのかたされる事いくはくの御いのちそとくちすさみに
しつることなとかしかましきまでいひしこそおかしかりしか

さとにまかてたるに殿上人などの車もやすからすそ人人いひなすな
るいとあまり心にひきいりたるおほえはたなければさいはん人もにくから
す又よるもひるもくる人をはなにかはなしなともかゝやきかへさん誠

ひむつましくなとあらぬもさこそはくめれあまりうるさくもけにあれば
この度出たる所をはいつくともなへてにはしらすつねぶさな
りまさの君などはかりそしり給へる左衛門尉のりみついきて物語なとす
るついでに昨日も宰相中將殿のいもうとのあり所さりとも

しらぬやうあらしといみしうとひ給しにさらにしらぬよし申しゝにあ
やにくにしひ給ひし事なといひてある事あらかふはいとわひしこそあ
りけれほとほとゑみぬへかりしに
わひてたいはん

のうへにあやしきめのありしをたゝとりにとりてくひにまきはししかはち
うけんにあやしのかひ物やと人も見けんかしされとかしこうそれにてなん
申さすなりにしわらひなましかはぶようそかし誠にしらぬなめり

とおほしたりしもおかしうこそなとかたねはさらになきこえ給ひそなといと
ゝいひて日比ひさしくなりぬよいたくふけて門おとろおとろしく

たゞけはなにのかく心もなくなるとをからぬほとをたゞくらんと聞て

とはすれはたきくち成けり左衛門のかみとてふみをもてきたりみなねに
たるに火ちかくとりよせてみればあすみと経のけち願にて宰相中将の御物
いみにこもり給へるにいもうとのあり所申せとせめらるゝにすちな

しさらにえかくし申すましきなんとやきかせ奉るへきいかに仰に

したかはんとそいひたる返事もかゝてめを一寸はかりかみにつゝみてやりつ
さてのちにきく一夜せめてとはれてすゝるなる所にゐてありき奉

りてまめやかにまめやかにさいなんにいとからしさてとかくも御かへ
りのなくてそゝるなるめはしをつゝみて給へりしかはとりたかへたるに
やといふにあやしのたかへものや人のもとにさる物つゝみてをくる人や
はあるいさゝかも心へさりけると見るかにくけれ

は物もいはて硯にあるかみのはしに

かつきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん
とかきていたしたれは歌にませ給ひたるかさらに見侍らしとてあぶき
かへしてにけていぬかうかたみにうしろみかたらひなとする中に

なに事ともなくて少中あしくなりたる比ふみおこせたりひんなきこと
待るともちきりきこえし事はすて給はてよそにてもさそなとは見給

へといひたりつねにいふ事はをのれをおほさん人は歌なとよむ

てえさすましきすへてあたかたきとん思ふへきいまはかきりやかてたえな
んと思はん時さる事はいへといひしかは此返事に

くつれするいもせの山の中なればさらによし野ゝ川とたに見し

といひやりたりしも誠に見すやなりにけん返事もせずさてかう

ふりえてとをたあふみのすけなといひしかはにくゝしてこそやみにしか
ものゝあはれしらせかほなる物はなたりまもなくかみて物いふ声

まゆねく

さてその左衛門の陣いきてのち里に出てしはしあるに

あさほらけなむつねにおほ

し出らるゝいかてさつれなくうちふりてありしならむいみしくめてたから

んとこそおもひたりしかなと仰せられたり御返事にかしこまりのよし申てわ
たくしにはいかてかめてたしとおもひ侍らん御前にもさりとも

なるをとめとはおほしめし御覽しけんとなむ思ふ給へしと聞

えさせたれば立かへりいみしく思ふへかめるなりかたたかおもてふせな
る事をはいかてかけいしたるそたゝこよひのうちによつこのことをすてゝま
いれさらすはいみしくくませ給はんとなん仰事あるとあればよろしから
んにてたにゆゝしましていみしくとあるもしにはいのちもさなからすて

ゝなんとてまいりにき

しきの御さうしにおはします比にしのひさしにふたんの御と経あるに仏な
かけ奉り法師のゐたるこそさらなり事なれ二日はかりありてゑん

のもとにあやしきものゝこゑにて猶その御仏供のおろし侍なんといへはいか
てかまたきにはといらふるをなにのいふにかあらんとたち出てみれば

おいたる女のほつしのいみしくすゝけたるかりはかまのたけのつゝとかや
のやうにほそくみしかきをひよりしも五寸はかりなることもとかやいふへか

らんおなしやうにすゝけたるをきてさるのさまにていふなりけりあれは
なに事いふそといへはこゑひきつくひて仏の御弟子にさふらへは仏

のおろしたへと申を此御はうたちのおしみ給ふと云はなやかにみ
やひかなりかゝる物は打くむしたるこそあはれなれうたても花やかな

るかなとてことものはくはて仏の御おろしをのみくうかいとたうと
き事かなといふけしきを見てなとかこと物もたへさらんそれかさふらはねは

こそとり申侍れといへはくた物ひろきもちゑなとを物にとり入てとらせた
るにむけになかよくなりてよろつの事をかたるわかき人人出いきて男

やあるいつこにかすむなとくちくちにとふにおかしき事そへ事
なとすればうたはうたふやまいなとはすやととひもはてぬにまるはた

れとねんひたちのすけとねたるはたまよしこれかすゑいとおほかり又
男山のみねの紅葉はさそ名はたつたつかしらをまるはしふるい

みしくにくければわらひにくみていねいねとおふにいとおかしこれになにと
らせんといふをきかせ給ひていみしうなとかくかたはらいたき事はせさせつ

るえこそきかてみゝをふたきてありつれそのきぬ一とらせてとくやりて
よと仰事あれはとりてこれたまはらすそきぬすゝけたりしろくてきよ

となけとらせたればふしおかみてかたにぞ打かけてまふ物か誠
ににくゝてみないりにしのちならひたるにやつねにみえしらかいてあ

りきてやかてひたちのすけと付たりきぬもしろめすおなしすゝけにてあれ
はいつちやりにつけんなどにくむに右近の内侍のまいりたるにかゝるものな

んかたらひつけておきためるかうしてつねにくる事とありしやうなどに兵
衛といふ人してまねはせてきかせせ給へはあれいかて見侍らんかならずみ

せさせ給へ御とくいなゝりさらによもかたらひとらしなとわらふ其後又あ
まなるかたいのいとあてやかなるかいてきたるを又よひ出て物なととふにこ

れははつかしけにおもひてあはれなれはきぬ一たまはせたる
をふしおかまはされとよしさて打なきよろこひていてぬるをはやこのひ

たちのすけいきあひて見てけり其後いと久しく見えねと誰かはおもひいて
んしはすの十よ日のほとに雪いとたかうふりたるを女房ともなとして物のふ

たにいれつゝいとおほくをくをおなしくは庭に誠の山をつくらせ

侍らんとてさぶらひめして仰事にていへはあつまりてつくるに殿守司の人にて御きよめにまいりたるなともみなよりにいとたかくつくりなす宮司なとまいりあつまりてことくはへことにつくれは所衆三四人ま

いりたる殿守司の人も廿人はかりになりにつけりさとなる侍

めしにつかはしなとするけふこの山つくり人にはるく給はずへし雪山にまいらさらん人にはおなしかすにとゞめよなといへは聞つけたるはまとひまいるもあり里とをきはえつけやらすつくりはてつれば宮司めして

きぬ二ゆいとらせてえんになけいつるを一つとりによりておかみ

つゝこしにさしてみなまかてぬうへのきぬなときたるはかたえさらてはかりきぬにてこそあるこれいつまでありなんと人人の給はするに

十よ日はありななとこの比のほとをあるかきり申せはいかにとと

はせ給へはむ月の十五日まではさぶらひなんと申を御まへにもえきはあらしとおほしめしたり女房などはすへて年のうちつこもりまでもあらしとのみ申にあまりとをくも申てけるかなけにえしもやはあらさんついたちなとそ申へかりけるとしたにはおもへとさはれさまでなくといひそめてん事はとてかたうあらかひつ廿日のほとに雨なとふれときゆへく

もなしたけそ少おとりもて行しら山の観音これきやさせ給なといのるも物くるをさせてその山つくりたる日式部丞たゞたか御使

にて参たればしとねさし出物なといふに今日の雪山つくらせ給はぬ所なんなき御前のつほにもつくらせ給へり中宮こき殿にもつくらせ

給へり京極殿にもつくらせ給へりなといへは

こゝにのみめつらしとみる雪の山所所にふりにけるかな

返しはえつかふまつり

けりさしとあされたるみすの前にて人にかたり侍らんとてたちにき歌

はいみしくこのむときゝしにあやし御前に聞召ていみしくよくとそ

おもひつらんと給はするつこもりかたに少ちいさくなるやうにな

れと猶いとたかくてあるにひるつかたえんに人々いてぬなとしたるにひたちすけ出きたりなといとひさしくみえさりつるといへはなにかはいと心

うき事の侍しかはといふ何事そとふになをかくおもひ侍りしなりとてなかやかによみいづ

うら山しあしもひかれすわたつうみのいかなるあまに物たまふらん

となんおもひ侍しといふをにくみわらひてめも見いれねは雪山にのほ

りてかゝくりありきていぬる後に右近の内侍にかくなんといひやりたれ

はなとかは人そへてこゝには給はせさりしあれかはしたなくて雪の山までか

ゝりつたよひけんこそいとかなしけれとあるを又わらふ雪山はつれな

くて年もかへりぬついたちの田又雪おほくふりたるをうれしくも

ふりつみたるかなと思ふにこれはあひなし始のをはきていまのを
はかきすてよと仰らるうへにてつほねにいとくおるれはさぶらひのおさ
なる物ゆの葉のことあるとのみきぬの袖のうへにあをきかみの松につけ
たるをきてわなくきいてたりそはいつこのそとくへは齋院よりといふに
ふとめてたくおほえてかへりまいりぬまた御とのこもりたれはもやにあ
たりたるみかうしを五はんなどかきよせてひとりねんしてあくるいとをもし
かたつかたなれはひしめくにおとるかせ給ひてなとさはするとの給へ
はすれは齋院より御文の候はんにはいかてかいそきあげ侍らざらんと
申にけにいとかりけるかなとておきさせ給へり御文あけさせ給へれ
は五寸はかりなるうちに二すちをうつゑのさまにかしらつゝみなとし
て山橋ひかけ山すけなとつくしけなにかさりて御文はなしたくな
るやうあらんやはと御覽すれはうつゑのかしらつゝみたるちひさきかみに
山とよむをのくひくきを尋ぬれはいはひの杖の音にそ有ける
御返かくせ給ほともいとめてたし齋院にはきこえさせ給ふ御返も
なを心ことにかきけかしおほく御ようい見えたり御使にしるきをり物の
ひとへすわうなるは梅なめりかし雪のふりしきてたるにかつきてまいるも
おかしうみゆ此度の御返をしらすなりにしこそくちおしかりしか
雪の山は誠にこしのにやあらんと見えてきえけもなしくるくなりて
見るかひもなきさまそしたるかちぬる心ちしていかて十五日待つ
けさせんとねんすれと七日をたにえすくさしと猶いへはいかてこれみ
はてんとみな人おもふほとにはかに三日うちへいらせ給ふへしい
みしうくちおし此山のはてをしらすなりなん事とまめやかに思ふほとに
人もけにゆかしかりつる物をなといふ御前にも仰せらるおなしくは
いひあてく御覽せさせむとおもへるかひなければ御物はこ
ひさはかしきにあはせてこもりりといふ物もつあちのくにひさし
さしてゐたるをえんのもとちかくよひよせて此雪の山いみしくまもりてわ
らはへ人なとにふみちらせこほたせて十五日までさぶらは
せよくまもりて其日にあたらはめてたきろく給はせんとすわたくしにも
いみしき悦いはんなどかたらひてつねにたいはん所の人けすなと
にこひてにくまるくた物やなにやいとおほくとらせたれはうちゑみて
いとやすき事たしかにまもり候はんわらはへなとそのほり侍らんといへ
はそれをせいしきかせさらん物は事のよしを申せなといひきかせてい
らせ給ひぬれは七日まで候て出ぬその程もこれかうしろめたきま
くにおほやけ人すましおさめなとしてたえずいましめにやり七日の御節供の
おろしなとをやりたれはおかみつる事なとかへりてはわらひあへりさと
にてもあくる則これを大事にしてみせにやる十日のほとには五六

尺はかりありといへはうれしく思ふに十三日の

夜雨いみしくふれはこれにそきえぬらんといみしうくちおし今日

も待つてとよるもおきぬてなけはきく人も物くるをしとわら

ふ人のおきて行にやかておきぬてけすおこさするにさらにおきねは

にくみはらたゝれておきてたるをやりてみすればわらふたはかりになり

て待るこもりいとかしこうわらはへをよせてまもりてあすあさて

まてもさふらひぬへしらく給はらんと申といへはいみしくうれしくいつ

しかあすにならばいとゝう歌よみて物にいれてまいらせんと思ふもいと心

もとなうわひしうまたくらきにおほきなるおりひつなともたせてこれに

しるからん所ひと物入てもてこきたなけならんはかきすてゝなといひ

くゝめてやりたれはいとゝくもたせてやりつる物ひきさけてはやううせ侍

りにけりといふにいとあさましおかしう読いてて人にも語りつたへさ

せんとうめきすんしつる歌もいとあさましくかひなくいかにしつ

るならん昨日さはかりありけん物をよのほとにきえぬらん事といひう

んすれはこもりか申つるはるくを

たまはらすなりぬる事と手を打て申侍りつるといひ

さはくに内より仰事ありてさて雪はけふまでありつやとの給はせたれは

いとねたく口おしけれと年の内ついたちまでにあらしと人人のけいし給

ひし昨日の夕暮まで侍しをいとかしこしとなむおもひ給ふるけふまではあ

まりの事になん夜のほとに人のにくかりてとりすてたるにもやとなむをし

はかり侍とけいせさせ給へと聞えつさて廿日あいたるにもまつこの

事を御前にもいふみなきこえつとてふたのかきりひきさけてもて

きたりつる法師のやうにて則まうてきたりしかあさましかりし事

ものゝふたにこ山うつくしうつくりてしるきかみに歌いみしくかきてまいら

せんとせし事なとけいすれはいみしくわらはせ給ふ御前なる人人もわらふ

にかう心に入ておもひける事をたかへたれはつみうらん誠に四日の夕さ

りさふらひともやりてとりすてさせしそ返事にいひあてたりしこそいとあ

かしかりしかそのおきないてきていみしうてをすりていひけれと仰事そ

彼里よりきたらん人にかうきかすなさらはやうちこほたせんといひ

て左近のつかひ南ついちのとにみなとりすてゝいとたかくておほく

なんありつといふなりしかはけに廿日まても待つけえうせすは

ことしの初雪にもふりそひなましうへもきこしめしていとおもひよりかた

くあらかひたりと殿上人などにも仰られけりさてもその歌をかたれ

いまはかくいひあらはしつれはおなし事かちにたりかたれなと御前に

もの給はせ人人もの給へとなにせんにかさはかりの事をうけ給はりな

からはけいし侍らんなとまめやかにつく心うかれはうへもわたら

せ給て誠にとし比はおほえの人なめりと見つるをあやしとおもひしな
とおほせらるゝにいとつらく打もなきぬへき心ちそするいてあはれい
みしき世中そかし後にふりつみたりし雪をうれしとおもひしをそれ
あひなしとて書すてよなとさふらひしと申せはけにかたせしとおほし
けるならんとうへもわらわせおはします

めてたき物からにしきかさりたちつくり仏のもくゑいるあひよく花ぶさ
なかくさきたる藤の松にかゝりたる六位の藏人こそなをめてたけれ

いみしき君たちなれともえしもき給はぬあやをり物を心にまかせてきたるあ
を色すかたなどのいとめてたきなり所衆雑色などの人の

子ともなにて殿原の四位五位もつかさあるかしもにう

ちゐてなにとみえさりしも藏人になりぬれはえもいはすそあさましくめ

てたきや宣旨もてまいり大饗のあまくりのつかひなとに

参たるをもてなしきやうようし給さまいつこなり

しあまくたり人ならんとこめておほゆれ御すめの女御后おはし

ます又姫君なときこゆるも御使にて参りたるに

御文とりいるゝよりうち始しとねさし出る袖くちなとあ

けくれ見しものとおほえすしたかさねのしりひきちらしてゑぶなるはいま

すこしおかしうみゆみつかかさかつきさしなとし給を我心にも

おほゆらんいみしうかしこまりへちにぬし家の子の君たちをもけし

きはかりこそかしこまりたれおなしやうにうちつれありく

うへのちかくつかはせ給さまなとみるはねたくさへこそおほゆれ

御文かゝせ給へは御硯のすみすり御うちはなとまいりたまつ

われつかうまつるにみとせはかりのほとをなりあしくものゝ色

わるくたき物かなとよろしうてましろはんはいふかひなき物なりかう

ふりえてをりん事ちかくならむたに命よりはまさりて

おしかるへき事をりむしのその御たまはりなと申てまとひをるこ

そいとくちおしけれ昔の藏人はことし

の春よりこそなきたちけれいまのよの事はしりくらへをなんすると

かさえある人いとめてたしといふもをろかなりかほもいとにくけ

に下らうなれともことなる事なきけれとも世にやんことなき

物におほされかしこき人の御前にちかつきまいりさるへきことなとゝは

せ給ふ御文の師にて候はゝめてたくこそお

ほゆれ願文もさるへき物の序つくり出してほめらるゝいとめて

たし

法師のさえあるすへてい

ふへきにもあらず持経者の一人してよむよりもあ

またか中にて時なとさたまりたる御と経などになをいとめてたきなりくら
ふなりていつら御と経あふらをそしなといひてよみやみたるほとし
のひやかにつゝけみたるよ居のひるの行

けい御うぶやみやはしめのさほうしゝこまいぬ大しやうしなとも
て参て御ちやうの前にしつらひすへ内膳御へついわたしたてまつ
りなとしたる姫君なときこえしたゝ人とそ露見えさせ給はぬ一の
人の御ありき春日まうてえひ染のおり物すへてむらさきなる

はなにもなにもめてたくこそあれ花もいともかみも

むらさきの花のなかにはかきつはたそすこしにくき色はめてたし六

位のとのおすかたのおかしきにもむらさきのゆへなめりひろき庭に雪のふり
しきたる今上一の宮またわらはにておはしますか御おちに上達部などの

わかやかにきよけなるにいたかれさせ給ひて殿上人なとめしつかひ御むまひ
かせて御覽しあそはせ給へるおもふ事おはせしとおほゆ

なまめかしき物

ほそやかにきよけなるきんたちのなをし

すかたおかしけなる童女のうへのはかまなと

わさとはあらてほころひかちなるかさみはかりきてくす玉な

となかくつけてかうらんにもとに扇さしかくしてゐたるわか

き人のおかしけなる夏の木丁の下打かけてしろきあやふたあゐひきかさねて

ゝならひしたるうすやうのさうしむらこのいとしておかしくとちたる柳

もえたるにあをきうすやうに書たる文つけたるひけこのおかしう

そめたる五葉の枝につけたるみへかさねの扇いつへはあまりあつくても

となとにくけなりよくしたるひわりこしろきくみのほそき新敷も

なくていたくふりてもなきひはた屋にしやうぶうるはしく

ふき渡したるあをやかなるみすの下よりくち木かたのあさやかに

ひもいとつやゝかにてかゝりたるひもの吹なひかされたるもい

とおかし夏のもかうのあさやかなるすのこのかうらん

のわたりにいとおかしけなるねこのあかきくひつなにしろきふたつきて

はかりのをくひつきて引ありくも

なまめいたる五月の節のあやめのくら人さうぶのかつらあかいも

の色にはあらぬをひきくたいなとしてくす玉をみこたちかんだち

めなのとたちなみ給へるに奉るもいみしうなまめかしとりてこしに

ひきつけてふたうはいし給ふもいとおかし

ひとりのわらはをみの

君たちもいとなまめかし

六位のあを色の殿ぬす

かた臨時のまつりの舞人五節のわらはなまめきたり

宮の五節いたさせ給ふにかしつき十二人こと所にはみやす所の

人いたすをはわるき事にそすると聞にいかにおほすにか宮の

女房を十人いたさせ給ふたりは女院淑景舎の人やかてはらから

なりけり辰の日のあをすりのからきぬかさみをきさせ給へり

女房にたにかねてさしもしらせす殿上人にはましていみしうかくしてみな

さうそくしたちてくらふなりたるほともてきてきすあかひもいみしう

むすひさけていみしくやうしたるしるききぬにかたきのかたはゑにかきたり

をり物のからきぬのうへにきたるは誠にめつらしき中にわらは

ゝいますこしなまめきたり下つかへまてつゝきたちてゐたるかん

たちめ殿上人おとろけうしてをみの女房と付たりをみの君達はとに

ゐて物いひなとす五節のつほねをみなこほちすかしていと

あやしくてあらすといことやうなりその夜までは猶うるはしくて

こそあらめとの給はせてさもまとはさす木丁とものほころひゆいつ

ゝこほれいてたり小弁といふかあかひものとけたるをこれむすはゝやとい

へは実方の中將よりてつくるふにたゝならず

あし引の山井の水はこほれるをいかなるひものとくる成らん

といひかく

わかき人のさるけせうのほとなれはいひにくきにやあらん返しもせずそ

のかたはらなるおとな人たちも打すてつゝともかくもいはぬを宮つ

かさなとはみゝとゝめて聞けるにひさしく成にけるかたはらいたさにこ

と方よりいりて女房のもとによりてなとかうはおはするそなとそさゝめく

なるに四人はかりをへたてゝゐたれはよくおもひえたらんにもいひにくし

まして歌よむとしりたる人のおほろけならさらんはいかてかとつゝまし

くこそわろけれよむ人はさやはあるいとめてたうねとぶとこそはい

へとつまはしきをしありくもいとおしけれ

うす氷あはにむすへるひもなれはかさす日影にゆるふはかりを

と弁のおもとゝいふにつたへさするにきえ入つゝえもいひやらすなと

かとかとみゝをかたむけてとぶにすこしことゝもりする人のいみしうつくる

ひめてたしときかせんとおもひければえもいひつゝけす成ぬるこそ中中

はちかくす心ちしてよかりしかおりのほるをくりなとなやましといひぬ

りぬる人をもの給はせしかはある限むれたちてことにも似すあまりこ

そうるさけなめれまひ姫はすけまさのむまのかみのむすめ染殿の

式部卿の宮の御をとうとの四の君の御はら十二にていとおかしけな

りはての夜もをひかへにもさはかすやかてしゝうてんよりとをりてせ

いりやうてんをまへの東のすのこより舞姫をさきにてうへ

の御つほねへまいりしほとおかしかりき

ほそたちのひらをつけてきよけなるおのこのもてわたるもいとなまめかしむ
らさきのかみをつゝみてふんしてふさなかき藤につけたるもいとおかし
内裏は五世ちのほとこそすゝるにたゝならて見る人もおかしおほゆれ
とのもりつかさなどの色色のさいてをものいみのやうにてさいしきつ

けたるなともめつらしくみゆ清涼殿のそりはしにもとゆいのむらこい
とけさやかにていてゐたるもささままにつけておかしうのみうへさ
うしわらはへともいみしきいるふしとおもひたるいとことはり

なり山あひ日影なとやないはこに入てかうふりしたるをのこのもて
ありくいとおかしう見ゆ殿上人ひ

やうしにしてつかさまされとしきなみそたつといふ歌をうたひてつほねと
ものまへ渡るほとはいみしくそひたちたらん人の心さはきぬへし
かしまして里人たひにわらひなとしたるいとおそろしことの蔵

人のかひねりかさねものよりことにきよらにみゆしとねなとときたれと中
中えものほりぬす女房のいてゐたるさまほめそしりこの比はこと事

はなかめりちやうたいの夜行事の蔵人いときひしうもてなしてかひつくる
ひ二人わらはよりほかはいるましとてをさへておもにくき

までいへは殿上人なと猶これひとりばかりはなとの給ふうらやみあり
いかてかなとかたくいふに宮の御かたの女房廿人はかりをしこもりて
ことこしういひたる蔵人なにともせず戸をゝしあけてささめきいれ

はあきれていとこはずちなきよかなとてたてるもおかしそれにつきてそか
しつき友もみないけるけしきいとねたけなりうへもおはしましていと

かしと御覽しおはしますらんかしわらはまひの夜はいとおかしとうたいに
むかひたるかほともいとらうたけにおかしかりき

むみやうといふひはの御ことをうへのもてわたらせ給へるを見なとしてか
きならしなとすいへはひくにはをゝてまさくりにしてこれか名

ないかにとかやなときこえするにたゝいとはかなく名もなしとの給はせた
るはなをいとめてたくこそおほえしかしけいしやなとわたり給ひて御物語
のつゐてに丸かもとにいとおかしけなるさうのふゑこそあれ殿のえ

させ給りしとの給を僧つの君のそれはりうえんにたうへをのれかもとに
給はりて猶ことことをの

給ふにいらへさせ奉んとあまた度聞え給ふになを物もの給ねは
宮の御前のいなかへしとおほいたるもの

御ふゑの名を僧都の君もえしり給はさりければ
たゝつらめしとおほしためるこれはしきの御さうしにおはしましし時の

事なりうへの御前にいなかへしといふ御ふゑの候なり御まへに
候物ともはみなことふえもめつらしき名つきてこそあれひはゝ

けんしやうほくはゐてゐけう無名なと又わこんなともくちめしほかま具な
とそきこゆるすいろうこすいろうたの法師くきうちはふたつなにくれ
とおほくきこえしかとわすれにけり京殿一のたなにといふことくさ

は頭中将こそし給か

うへの御つほねのみすのまへにて殿上人曰一日ことふえふきあそひくら
してまかてわかるゝほとまたかうしをまいらぬに

御となあぶらをさしいてたれはとりいれたるかあらはなれはひわの御こと
をたゝさまにもたせ給へり紅の御そのいふもよのつねなるうち

もはりたるもあまた奉りていとくろくつやゝかなる御ひ

わに御そのそてをうちかけてとらへさせ給へるめてたきにそはより御ひ
たいのほとしるくけさやかにてはつかにみえさせ給へ

るはたとぶへきかたなくめてたくちかくゑ給へる人にさしよりてなかはか
くしたりけんもえかうはあらざりけんかしそれはたゝ人にこそありけめ
といふを聞てみちもなきをわりなくわけいりてけいすればわらはせ給

ひて我はしりたりやとなん仰せらるゝとつたふるもおかし

御めのとの大夫のけふの日むかへくるにたまはする扇ともの中にかた

つかたは日いとはなやかにさし出たてひ人のある所も中将のたちなといふさ
まいとおかしうかきていまかたつかたには京のかた雨いみしうぶ

りたるになかめたる人なとかきたるに

あかねさす日にむかひてもおもひ出よみやこははれぬなかめすらんと

こと葉に御てつからかゝせ給しあはれなりきさる君君をゝ

きたてまつりてとをくこそえいくましけれ

ねたき物これよりもやるも人のいひたる返事もかきてやりつるの

ちにもしひとつふたつなとおもひなをしたるとみの物ぬふにぬい

はてつとおもひてはりを引ぬきたれははやむすはさりけり又か

へさまにぬいたるもいとねたしみなみの院におはします比西のたいに殿

のおはしますかたに宮もおはしませはしんでんにあつまりぬてさうさうし

けれはたはふれあそひをしわた殿にあつまりぬなとしてあるにこれたゝいま

とみの物也たれもたれもあつまりて時はさすぬいてまいらせよ

とてひらきぬの御そをたまはせたるみなみおもてにあつまりぬて御そか

たみつゝたれかたくぬい出るといとみつゝちかくもむかはす

ぬぶさまもいと物くるをし命婦のめのといとぬいはてゝうちをきつゝ

きにゆたけのかたの御身をぬいつるかそむきさまなるをみつけすとちめもし

あへすまとひをきてたちぬるに御せあはせんとすれははやうたかひに

けりわらひのゝしりてこれぬいなをせといふをたれかあしうぬいたり
としりてかなをさんあやなとならほこそぬいたかへの人のけ

になをさめむもんの御そなりなをしるしにてかなをす人たれかあらん
たゝまたぬい給はさらん人になをさせよとて聞もいれねはさいひ

てあらんやとて源少納言新中納言などいふ

なをし給ひしかほ見やりてゐたりしこそおかしかりしかこれは

よさりのほらせ給はんとてとくぬいたらん人をおもふとしらんと仰られ
しかみすましき人にほかへやりたるふみとりたかへてもて行たるいと

ねたしけにあやまちいてけりとはいはてくちかたうあらかひたる人をたにおも
はずははしりもうちつへしおもしろき萩すゝきなとをうへてみるほどにな

かひつもたる物すきなとひきさけてたゝほりにほりていぬるこそわりなふ
ねたかりけれよろしき人なのあるおりはさもせぬ物をいみしうせいすれと
たゝ少などいひていぬるいふかひなくねたし受領などの家に

しもめなどのきてなめけに物いひさりとて我をはいかゝお

もひたるけはひにいひ出たるいとねたけなりみすましき人の文を

ひきとりてにはかにおりてみだてるいとわひしうねたくをいてゆけとす

のもとにとまりて見るこそとひも出ぬへき心ちすれ

すゝるなる事はらたちておなし所にもねすみしくりいつるをしの

ひてひきやすれとわりなく心こわければあまりになりて人もさはよかなりと
えしてかひくゝみてふしぬるのちいとさむきおりなとにたゝひとへきぬ

はかりにてあやにくかりておほ方みな人もねたるにさすかおきい

らんあやしくて夜のふくるまゝにねたくおきてせいぬへかりけるなどお

もひふしたるにおくにもものうちなりなとしておそろしければやら
まるひよりてきぬひきあくるにそらねしたるこそいとねたけれなをこそこは
かり給はめなとうちいひたるよ

かたはらいたき物まらふとなどにあひて物いふにおくのかたにうちとけ事

人のいふをせいせてきく心ちおもふ人のいたくゑいさかしかりてお

なし事したる聞ぬたるをもしらて人のうへいひたるそれはな

にはかりならぬつかひ人なれとかたはらいたしたひたち所

ちかき所などにてけすとのされかはしたるにくけなきちこそゝのれか心ち
にかなしと思ふまゝにうつくしみあそはしこれかこゑのまねにていひける
事なとかたりたるさえある人のまへにてさえなき人の物おほえかほに人の
名なといひたる事によしともおほえぬを我歌を人にかたりきかせて人
のほめし事などいふもかたはらいたし人のおきてものかたりな

とするかたはらにあさましう打とけてねたる人またねもひきとゝのへぬ事

をこゝろひとつやりてさやうのかたしりたる人の前にてひくいとゞしうす
まぬむこのさるへき所にてしうとにあひたる

あさまさしきものさしくしみかくほとにものにさへておりたる

車のうちかへされたるさるおほのかなるものは所せうひさしくなと
やあらんとこそ思ひしかたゞゆめの心ちしてあさましうあやなし人
のためにはつかしき事つゝみもなくちこもおとなもいひたるかな
らすきなんとおもふ人の待あかしてあかつきかたにたゞ

いさゝかわすられてねいりたるにからすのいとちかくかゝとなくにう
ち見あけたれはひるになりたるいとあさまし

てうはみにとつとられたるむけにしらすみすきかね事を人

のさしむかひてあらかはすへくもなくいひたるもの打こほしたるも
あさましのりゆみにわなゝくわなゝく久しうありては

つしたる矢のもとはなれてこと方へゆきたる

くちおしき物節会仏名に雪のふらて雨のかきくらしふりたる

節会さるへきおりの御物忌にあたりたるいとみいつしか

おもひたる事のさはる事いてきてにはかにとまりたるいみしうほしうす
る人の子うまでとし比くしたるあそひをもしみすへき事もあるにかなら
すきなんとおもひてよひにやりつる人のさはる事ありてなといひてこぬ
くちおし男も女も宮仕所などにおなしやうなる人

もろともに寺へもつてものへも行にこのもしうこほれいてゞよう

いはけしからすあまり見くるしとも見つへくそあるにさるへき人の

馬にても車にてもゆきあひみすなりぬるいとくちおしわひ

てはすきすきしからんけすなどにも人に語つへからんにてもかな
と思ふもけしからぬなめりかし

五月の御さうしのほとしきにおはしますにぬりこめのまへふたまなる所
をことに御しつらひしたれはれいさまならぬもおかしついたちより雨

かちにてくもりくもらすつれつねなるを郭公のこゑたつねありかはやとい
ふを聞て我も我もといてたつかものおくになにかしとかや七夕のわ

たる橋にはあらてにくき名そきこえしその渡りになん日ことになくと

人のいへはそれは日くらしななりといらふる人もありそこへとて五日

のあした宮つかさ車のこといひて北の陣より五月雨はとかめ

なきものそとていれさせをきたり四人はかりそのりてゆくうら山しかり
ていま一しておなしくなといへといなと仰せらるればききも

いれす情なきさまにてゆくにむまはといふ所にて人おほくさ

わくなに事するそとへはてつかひにてまゆみいるなりしはし御覽し

ておはしませとて車ととめたり右近中將みなつき給へるといへと

さる人もみえず六位などのたちさまよへはゆかしからぬ事そはやかけよ
とてゆきもて行は道もまつりのころおもひいてられておかしかうい

ふ所にはあきのふの朝臣家ありそこもやかて見んといひて車
よせておりぬ中たちことそきてむまのかたかきたるさうしあしろひや
うふみくりのすたれなとことさらにむかしの事をうつしたる

やのさまははかなたちてはしちかきあさはかなれとおかしきにけに
そかしかましとおもふはかりなきあひたる郭公の聲を御前

にきこしめさすさはしたひつる人々にもなとおもふ所につけ
てはかかる事をなんみるへきとていねといふ物おほくとり出てわか

きけす女とものきたなけならぬそのわたりの家のむすめ女なとひき出き
て五六人してこかせみもしらぬくるへき物ふしふたりしてひかせ

て歌うたはせなとするをめつらしくてわらふにほとときすの歌よまんな
としたるわすれぬへしよこゑにあるやうなるかけはなとしてものくわせ
たるを見いる人なければ家あるしいとわろくひなひたりかかる所にき
ぬる人はようせすはあるもなとせめいたしてこそまいる

へけれむけにかくてはその人ならすなといひてとりはやし此したわらひは
てつからつみつるなといへはいかてか女官などのやうにつきなみては

あらんなといへはとりおろしてれいのいふしにならはせたるお

まへたちなれはとてとりおろしまかなひさわくほとに雨ふりぬへしといへ
はいそきて車にのるにさて此歌はここにてこそよまめとい

へはさはれみちにてもとなといひて卵の花いみしくさきたるを
おりつつ車のすたれそはなとに

ななき枝をふきささせたれはたた卵花かき

ねをうしにかけたるやうにそみえけるともなるをのこともいみしうわつら
ひつゝあしるをさへつきうかちつっこまたしましとさしあつむなり人も
あはなむとおもふにさらにあやしき法師あやしのいふかひなきものみたま
さかにみゆるにいとくちおしちかつきぬさりともしとかうてやま

んやはこの車のさまをたに人にかたらせてこそやまめと

て一條殿のもとにとめて侍従殿やおはします郭公の聲ききていまな
むかへり侍といはせたるつかひたたいままいるあか君

君となんの給へるさふらひにまひろけてさ

しぬきたてまつりつといふにまつへきにもあらずとてはしらせてつち御門
さまへやらするにいつのまにかさうそくしつらんおひは道のままにゆひて
しはしはとをひくるともにさふらひさうしき物はかては

しるめるとてやれといとそかしくつちみかといきつきぬるにそあつち
まとひておはしてまつこの車のさまをいみしくわらひ給ふうつつの人

のりたるとなんさらに見えぬをおりて見よなとわらひ給へはともな
りつる人とももけうしわらふ歌はいかにかそれきかんとの給へはいま
御前に御覽せさせてこそはなといふほどに雨誠にふりぬな

とかことみかとのやうにあらてこのつち御門しもうへもなく

つくりそめけんと今日こそいとにくけれなといひていかてかへらんすらん
こなたさまはたたくれしとおもひつるに人めもしらすはしられつるをあう
いかん事こそいとすさましけれとの給へはいさたまへかしうちへなといふ
それもゑほうしにてはいかてかとりにより給へなといふに

雨まめやかにふれはかさなきおのこともまたたひきいれつ一條よ

りかさをもてきたるをささせてうち見かへり見かへりこの度はゆるゆると物
うけにて卯の花はかりをとりにおはするもおかしさてまいりたれはありさ
まなとはせ給ふうらみつる人々えし心うかりながら藤侍従一條

のおほちはしりつるほどにかたるにそみなわらひぬるさていつら歌はとと
はせ給ふかうかうけいすれはくちおしの事やうへ人などのきかんに

いかてかおかしき事なくてあらんその聞つらん所にてふとこ

そよまましかあまりきしきことさめつらんそあやしきやここにて

もよめいふかひなしなどの給はすれはけにとおもふにいとわひしきを
いひあはせなとする程に藤侍従のありつる卯花につけて卯花の
うすやうに

郭公なく音たつねきみ行ときかは心をそへもしてまし

返事待らんたとつほねへすすりとりにやれはたたこれして

とくいへとて御硯のふたにかみなといれてたまはせ給へは宰相の

君かき給へといふをなをそこになといふほどにかきくらし雨ふりて神

もおとろおとろしうなりたれはものもおほえすたたおろしにおろすし

きの御さうしはしとみをそみかうしにまいりわたしまとひしほどに歌の返
事もわすれぬいとひさしくなりてすこしやむほとはくらくなりぬたたいま

なをその御返事奉らんとてとりかかるほどに人々上達部な

と神の事申にまいり給へはにしおもてに出て物なと聞ゆる

程にまきれぬ人はたさしてえたらん人こそしらめとてやみぬ大

方この事にすぐせなき日なりとうしていまはいかてさなんいきたりし

とたに人にきかせしなとそわらふをいまもなとそのいきたりし

人とのいはさらんされともさせしとおもふにこそあらめと

ものしけにおほしめしたるもいとおかしされといますましくなりにて侍
なりと申すすさましかるへき事かはなどの給はせしかとやみにき

二日はかりありてその日の事なといひいつるに宰相の君いかにそてつ

からおりたるといひししたわらひはとの給ふをきかせ給ひておもひいつる
事のさまよとわらはせ給ひてかみのちりたるにしたわらひこそ戀しかりけ
れとかかせたまひてもといへとおほせらるるもおかしほとときす尋
てきかし聲よりもかきてまいらせたれはいみしうつけはりたりやか
うまてたにいかて時鳥の事をかけつけらんとわらはせ給ふ

この歌すへてよみ侍しとなんおもひ侍物をもの

おりなと人のよみ侍るもよめなと仰られは得候ましき心

ちなんし侍るいかてかはもしのかすしらす春は冬の歌をよみ秋は春

のをよみ梅のおりは菊なとよむ事侍らんされと歌よむといは

れ侍し末々はすこし人にまさりてそのおりの歌はこれこそあり

けれさはいへとそれか子なれはなといはれたらんこそかひある心ちして侍

らめ露とりわきたるかたもなくてさすかに歌かましく我はとおもへるさ

まにさいそによみ出侍らんなんき人のためにいとをしく侍なとまめや

かにけいすれはわらはせ給ひてさらはたた心にまかす我はよめとも

いはしとの給はすれはいと心やすくなり侍ぬ今は歌の事おもひかけ侍

らしなといひてあるころかうらんせさせ給て内大臣殿いみしう心に

うけさせ給へり夜打ふくるほとに題出して女房に歌よませ給

へはみなけしきたちゆるかしいたすに宮の御前にちかく候て物

けいしなと事をのみいふもおとと御覽してなとか歌はよまて

はなれぬたる題とれとの給ふをさるましくうつけ給て

歌よむましくなりて侍れはおもひかけ侍らすことやうなる事誠

にさる事やは侍なとかはゆるさせ給いとあるましき事なりよしこと

時はしらすこよひはよめとせめさせ給へときようききもいれて候

にこと人とも讀出してよしあしなとさためらるるほとにいささか

なる御文をかきて給はせたりあけて見れは

もとすけかのちといはるる君しもやこよひの歌にはつれてはをる

とあるを見るにおかしき事そたくひなきやいみしくわらへは何事

そ何事そおとものたまふ

その人の後といはれぬ身なりせはこよひの歌は先そよままし

つつむ事候はすはちうた成ともこれよりそいてまつてこましとけ

いしつ

御方御方君たちうへ人なと御前に人おほくさぶらへはひさしのはし
らによりかりて女房とものかたりしてゐたるに物をなけ給

はせたるあけてみれはおもふへしやいなや第ならずはいかかごと

はせ給へり御前に物語なとするつゐてにもすへて人には一におも

はれすはさらになにかせんたいみしうにくまれあしうせられて

あらん二三にてはしめともあらし一にてをあらんなといへは一乗の法なりと人々わらふ事のすちなめり筆かみ給はりたれば九品蓮臺の中には下品といふともとかきてまいらせたればむ

けにおもひくんしにけりいとわろしいひそめつる事はさてこそあらめとのたまはずれば人にしたかひてこそと申それかわろきそかし第一の

人に又ひとつにおもはれんとこそ思はれめとおほせらるるもいとおかし中納言殿まいらせ給て御扇奉らせ給ふにたかい多こそいみじき

ほねをえて侍れそれをはらせてまいらせんとするをおほろけのかみははるましければもとめ侍なりと申給ふいかやうなるにかあるととひきこえさせ給へはすへていみしく侍らさらましまた見ぬほねのさまなりとなむ人々

申誠にかはかりの見さりつとことたかく申給へはさて扇のに

はあらてくらけのなりときこゆればこれはたか家か事にしてんとてわ

らひ給ふかやうの事こそかたいたきもののうちにいれつへけれとこ

とにおとしそと侍れはいかかせん

雨のうちへはふるころけふもふるに御使にて式部丞のりつね参

たりれいの御しとねさし出したるをつねよりもをくおしやりてゐたれ

あれはたれかようそといへはわらひてかかる雨にのほり侍らはあしかたつ

きていとぶひんにきたなけになり侍りなんといへはなとけんそくれうにこ

そはならめといふをこれは御前にかしこう仰らるるにはあらすのふつね

かあしかたのことを申さらましかはえの給はさらましとて返々いひしこそ

おかしかりしかあまりなる御身ほめかなとかたはらいたくはやうおほきさい

の宮にゑぬたきといひて名たかきしもつかへんありけるみのかみにてう

せにける藤原の時から蔵人なりける時しもつかへともある所にたち

よりてこれやこの高名のゑぬたきなとさも見えぬといひける返事にそ

れときはに見ゆる名なりといひたりけるなんかたきにえりても

いかてかざる事はあらん殿上人上達部までもけうある事にの給

ける又さりけるなめりといままでかくいひつたふるはと聞えたりそれ又時か

らといはせたるなりすへて題いたしかうなん文も歌もかしこきとい

へはけにさる事あることなりさらは題いたさん歌よみ給へといふにいとよ

き事ひとつはなにせんにおなしうはあまたをつかまつらんなどいふほと

に御題はいてぬれはあなおそろしまかり出ぬとてたちぬてもいみじ

まなもかなもあしうかく人もわらひなとすれはかくしてなんあるといふ

もおかしつくも所の別當する比たれかもとにやりけるにかあらむもの

ゑやつやるとてこれかやうにつかまつるへしとかきたるまんなのやうもし

のよにしらすあやしきを見つけてそれかかたはらにこれかままにつかうまつ

らはことやうにこそあるへけれとて殿上にやりたれば人々とりてみていみ

しうわらひけるに大はらたちてこそうらみしか

淑景舎春宮にまいり給ふほと的事なといかかはめてたからぬことなし

正月十日参り給て宮の御かたに御文などはしけうかよへと御

たいめむなどはなきを二月十日宮の御かたにわたり給ふへき御せうそこ

あれはつねよりも御しつらひ心ことにみかきつくるひ女房なともみなよう

いしたり夜中はかりにわたらせ給ひしかはいくはくもなくてあけぬとうくわ

てんのひんかしの二まいに御しつらひはしたり

つとめていとく御かうしまいりわたしてあかつきに

殿うへひとつ日車にてまいり給ひにけり宮は御さうしのみなみに四尺の

屏風にしひんかしにへたてて北向にたてて御たたみ御しとね

うちをきて御火おけはかりまいりたり御屏風の南みちやうのまへに女

房いとおほくさふらぶこなたにて御くしなとまいるほとしけい

しやはみたてまつりたりしやとはせ給へはまたいかてか尺せん寺供養

の日たた御うしろをはつかにときこゆれはそのはしらと屏風との

もとによりて我うしろより見よいとつつくしき君そとの給は

すれはうれしくゆかしさまさりていつしかおもふこうはいのかたもん

うきもんの御すそとも紅のうちたる御そみつそたうへにひきか

さねてたてまつりたるもこうはいにはこききぬこそおかしけれ

いまはこうはいきてもありぬへしされともえきなどのに

くければ紅にはあはぬなりとの給はすれとたたいまめてたくみ

えさせ給ふたてまつりたる御そにやかて御かたちのにほひあは

せ給ふそ猶ことよき人もかくやおはしますらんとそゆかしきさてぬさり

いてさせ給ひぬれはやかて御屏風にそひつきてのそくをあしかめりうしろめ

たきわさときこえこつ人もありいとおかし御しやうしのいとひろう

あきたれはいとよくみゆうへはしろき御そとも紅のはりたる二は

かり女房のもなめりひきかけておくによりて東向におはすれはたた

御そなとみゆるしけしやは北に少よりて南向におは

すはうはいともあまたこくうすくてこきあやの御そすこしあか

きすわうの織物のうちきもえきのかたもんのわ

かやかなる御そたてまつりてあぶきをつとさしかくし給へるいとい

みしくけにめてたくうつくしと見え給ふ殿うす色の御なをしもえき

をりものの御さしぬき紅の御そとも御ひもさしてひさしのはしらに

うしろをめててこなたさまにむきておはしますめてたき御ありさまさまとも

をうちゑみてれいのたはふれこととをせさせ給ふしけいしやの

ゑにかきたるやうにうつくしけにてぬさせ給へるに宮はいとやすら

かにいますすこしおとなひさせ給へる御けしきの紅の御そにほひあは

せ給ひて猶たくひはいかてかとみえさせ給ふ御てうつまいるかの御か
たはせんようてんちやうくわてんをとをりてわらは二人しもつ
かへ四人してもてまいるめりからひさしのこなたのらうにそ女房六人はかり
候せはしとてかたへは御をくりしてみなかへりにけりさくらのかさみ
もえきこうはいなといみしくかさみなかくしりひきてとりつきまいらす
いとなまめかしをり物のからきぬともこほれいてすけまさのむま
のかみのむすめ少將の君北野野三位のむすめ宰相の君なとそちかく
はあるあなおかしとみるほとにこの御かたの御てうつ番のうねめ
あをすそのもからきぬくんたいひれなとしておもてなといとしろくてしも
つかへなととりつきてまいるほとこれはたおふやけしくからめいて
おかしおもののおりになりてみくしあけまいりて藏人ともまかなひのかみ
あけてまいらするほとにへたてたりつる屏風もをしあけつればかいま
見の人かくれみのとられたる心してあかすわひしければみ
すと木丁との中にてはしらのもとよりそ見奉る衣のすそもなとか
ら衣はみなみすの戸にをしいたされたれはとののはしのかたより御覽し出
してたそやかすみのまよりみゆるほととかめさせたまふに少納言
かもとのゆかしかりて侍ならんと申させ給へはあなはつかしかればふるき
とくいをいとにくけなるむすめとももちたりともこそ見侍れなどの給
御けしきいとしたりかほなりあなたにもおもものまいるうらやましくかた
つかたのはまいりぬとくきこしめしておきな女におろしをた
に給へなとたた日一日さるかうことをし給ふほとに大納言殿三
位中將松きみもゐてまいり給へり殿いつしかといたきと給
ひてひさにすへ給へるいとつつくしせはきえんに所せきひ
の御さうそくのしたかさねなとひきちらされたり大納言殿は物々しう
きよけに中將殿はいとらういとらうしくいつれもめてたきをみたてまつるに殿
をはさる物にてうへの御すくせこそめてたけれ御わらうたなときこ
えたまへとちんにつき侍らんとていそきたち給ひぬしはしありて式部のせ
うなにかしとかや御つかひにまいりたれはおものやりとの北によりたるま
に御しとねさし出てす御返はけふはとくいたさせ給ひつまた
しとねもと入ぬほとに春宮の御使にちかよりの少將まいりたり御文とり
いれてわた殿はほうきえんなれはこなたのえんにしとねさしいてたり
御文とり入てとのうへ宮なと御覽しわたす御返はやなとあれとと
みにも聞え給はぬをなにかしか見侍れは書給はぬなめりさらぬおりはま
もなくこれよりそ聞え給ふなるなと申給へは御おもてはずこ
しあかみながら少うちほをゑみ給へるいとめてたしとくなとつ
へも聞え給へはおくさまにむきてかかせ給ふうへちかくより給ひても

ろともにかかせ奉り給へはいとつつましけなり宮の御かたよりも

えきのおり物のこうちきはかまをしいたされたれは三位中將かつけ給

ふくるしけにおもひてたちぬ松君のおかしう物の給ふ

をたれもたれもつつくしかり聞え給ふ宮の御子たちとてひきいてたらんに
わるくは侍らしかなとの給はするをけになとかいままでさる事の

とそ心もとなきひつしの時はかりにえんたうまいるといふほともなく

打そよめきいらせ給へはみやもこなたによらせ給ひぬやかて御丁にいら

せ給ひぬれは女房みなみおもてにそよめき出ぬらうめんたうに殿

上人いとおほかり殿の御まへに宮つかさめしてくた物さかなめさ

す人々ゑあはせなと仰せらる誠にみなゑいて女房とものいひか

はずほとかたみにおかしとおもひたり日のいるほどにおきさせ給ひて山の

井の大納言めしいれてみうちきまいらせ給ひてかへらせ給ふに

殿大納言山の井の大納言三位中將内藏頭などみなさ

ふらひ給ふ宮のほらせ給ふへき御使にてむまの内侍のすけまいり給へりこ

よひはえなとしふらせ給ふを殿きかせ給ひていとあるましき事はや

のほらせ給へと申させ給に又春宮の御つかひしきりにあるほといとさはか

し御むかへに女房春宮のなともまいりてよくとそそのかしき

こゆまつさはかの君わたしきこえ給ひてとの給はすれはざりともしいかて

かとあるを猶見をくりきこえなどの給はするほといとおかしうめて

たしさらはとをきをさきにとてまつしけいしやわたり給ひ

て殿なとかへらせ給ひてそのほらせ給ふ道のほともとのの御さるかう事

にいみしくわらひてほとほとうちはしよりもおちぬへし

殿上より

たるをうへ

の御前きかせおはしましてよろしき歌なとよみたらんよりもか

かる事はまさりたりかしよういらへたりとおほせらる

二月つこもり風いたく吹て空いみしくくるきに雪すこし打ち

るほとくるとに殿守司きてかうしてさふらふといへはよりたるに

公任の君宰相中將殿のとあるを見ればふところかみにた

たすこし春ある心ちこそすれとあるはけにけふのけしきにとようあひ

たるをこれかもとはいかかつくへからんとおもひわつらひぬたれたれか

ととへはそれそれといふにみなはつかしき中に宰相の中將の御いらへ

をはいかかことならひにいひ出んと心ひとつにくるしきを御前に

御覽せさせむとすれともうへもおはしまして御とのこもりたり殿守司

はとくとくといふけにをそくさへあらんはとり所なければさ

はれとて空さむみ花にまかへてちる雪にとわななくわななくかきてとらせ

ていかか見給ふらんとおもふに佗しこれか事をきかはやと思ふにそしられたらほきかしとおほゆるをとしかたの中將など猶ないしに申てなさんとさため給ひしとはかりそ右兵衛佐中將にておはせしかたりたまひし

はるかなるもの千日のさうしはしむる日はんひのおひねりはしむる日みちのくにへ行人のあふ坂の關こゆるほとむまれたるちこのおとなになるほと大般若經御誦經ひとりして讀初日十

二年の山こもりの始のほる日

物のあはれしらせかほなる物はなたりまもなくかみつつものいひたるこゑまゆぬくおりのまみ

まさひろはいみしく人にわらはるる物をやいかにきくらんともにありく物ともいと人々しきをよひよせてなにしかかる物にはつかは

るるそいかかおほゆるなとわらふ物いとよくするあたりにてしたかさねの色うへのきぬなとも人よりはよくてきたるをこれのこと人にきかせはやなと

けにそこと葉つかひなどのあやしきさとにとのゐ物とりにやるに男一

人まかれといふにひとりしてもとりてまうてきなんものをといふにあやしの男や一人して二のものをはいかてもつへきそひとますかめに

ふたますはいるやといふをなてう事とする人はなけれといみしうわらふ人のつかひにて御返事とくといふをあなにくの男やか

まどにまめやくへたるこの殿上のすみ筆はなに物のぬすみかくしたるそいひさけならはほしうして人のぬすまめといふを又わらふ女院なやませ

給ふとて御使にまいりてきたる院の殿上人はたれたれかありつ

ると人のとへはそれかれなと四五人はかりいふに又はととへはさてはぬる人ともそありつるといふを又わらふもまたあやしき事にこそはあらめ人

まによりきてわかきみこそまつ物きこえんまつまつ人のの給る事そといへはなに事にかとて木丁のもとによりたれはむくるこめにより給へとい

ふを五たいこめにとなむいひつるといひて又わらふちもくの中のみよしあふらするにとうたいの打しきをふみてつるにあたらしきゆたなれ

はつようたらへられにけりさしあゆみてかへればやかてとうたい

はたうれぬしたうつはうちしきにつきてゆくに誠にみちこそしんとうしたりしか頭つき給はぬほとは殿上の大はんに人もつかすそれにまさひろ

はまめひともりをとりにこそうしのうしろにてやはらくひければひきあらはしてわらはるる事そかきりなきや

せきはあふ坂の關須磨の關白川の關

衣の關くきたの關ははかりの關たたこゑの關

すすかの關よこはしの關花の關はかりにたとしへ

なしや清見か關見るめか關よしよしの關こそいかに

おもひかへしたるならむとしらまほしけれそれを名こそその關とはいふにやあらんあふ坂のなとをさておもひ返したらは佗しからんかしあしからの關

森は大あらきのもりしのひのもりここゐの森木からしもの

森しのたの森いくたの森こわたの森

うつ木の森きく田の森岩瀬森

たちききの森ときはの森くろつきの森神なひの森うたた

ねの森うきたの森うへつきの森いはたの森たれその森

かそたての森かうたての森といふかみとまるこそまつ

あやしけれもりなといふへくもあらずた一木あるをなにごとにつけたるそ

卯月のつこもりに長谷寺に詣てよとの渡といふ物をせしかは

舟に車をかきすへて行にしやうふこもなどの末みしかくみえしをとらせ

たれはいとなかりけりこもつみたる舟のある岸こそいみしうおかしかりし

かたかせのよとにはこれを讀けるなめりとみえし三日といふにかへる

に雨のいみしうぶりしかはさうふかるとてかさのちいさきをきてはき

いとたかきをのこわらはなとの有も屏風の繪にいとよく似たり

湯はななくりの湯ありまの湯たまくりの湯